

# 新型コロナウイルス感染症の 県内発生について

～第四波の状況、その他～

## その9

和歌山県福祉保健部技監 野尻 孝子

2021年7月2日



# 直近の感染状況

令和3年7月1日現在

# 和歌山県内の新型コロナウイルス感染症 感染動向の推移

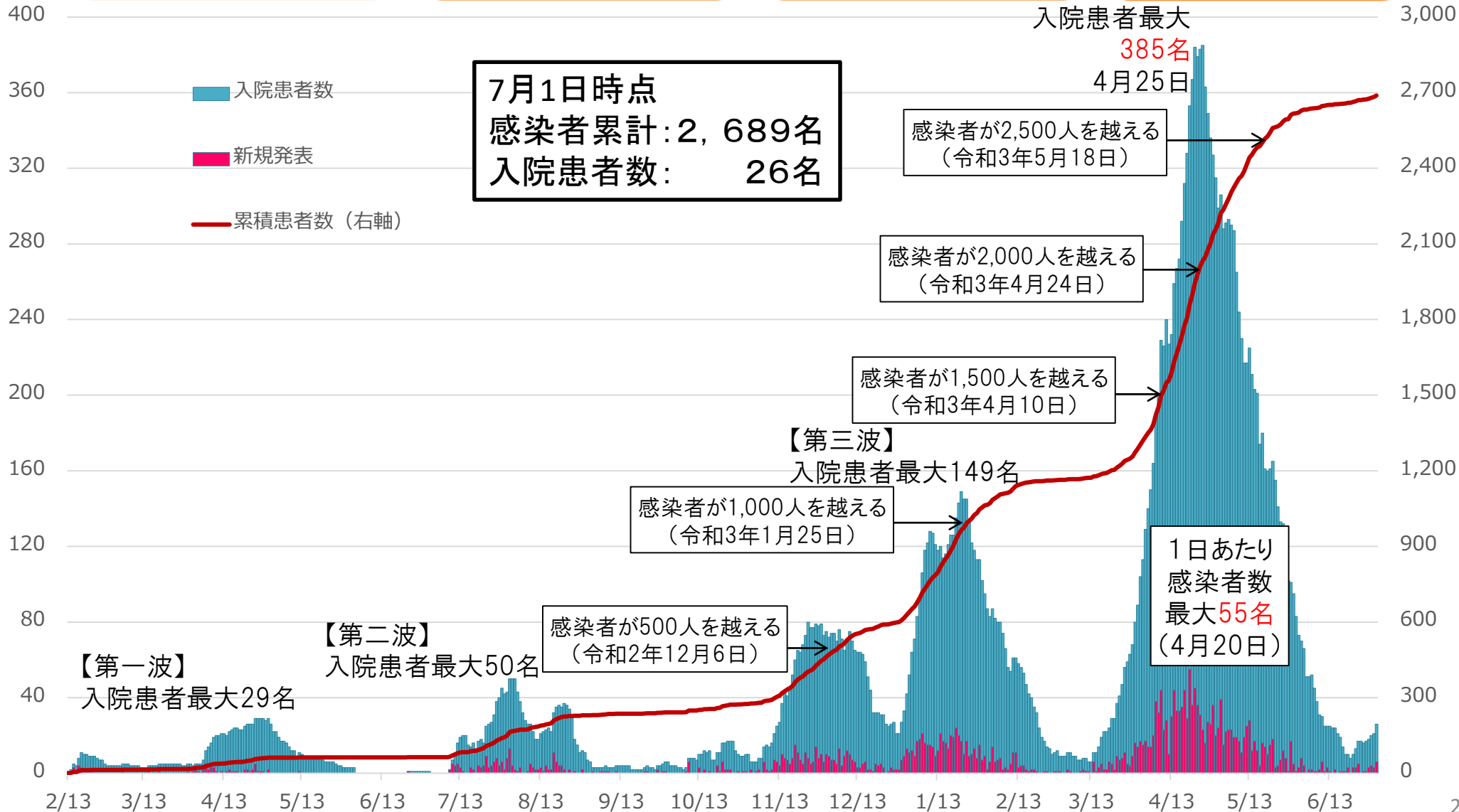
令和3年7月1日  
発表分まで

第一波

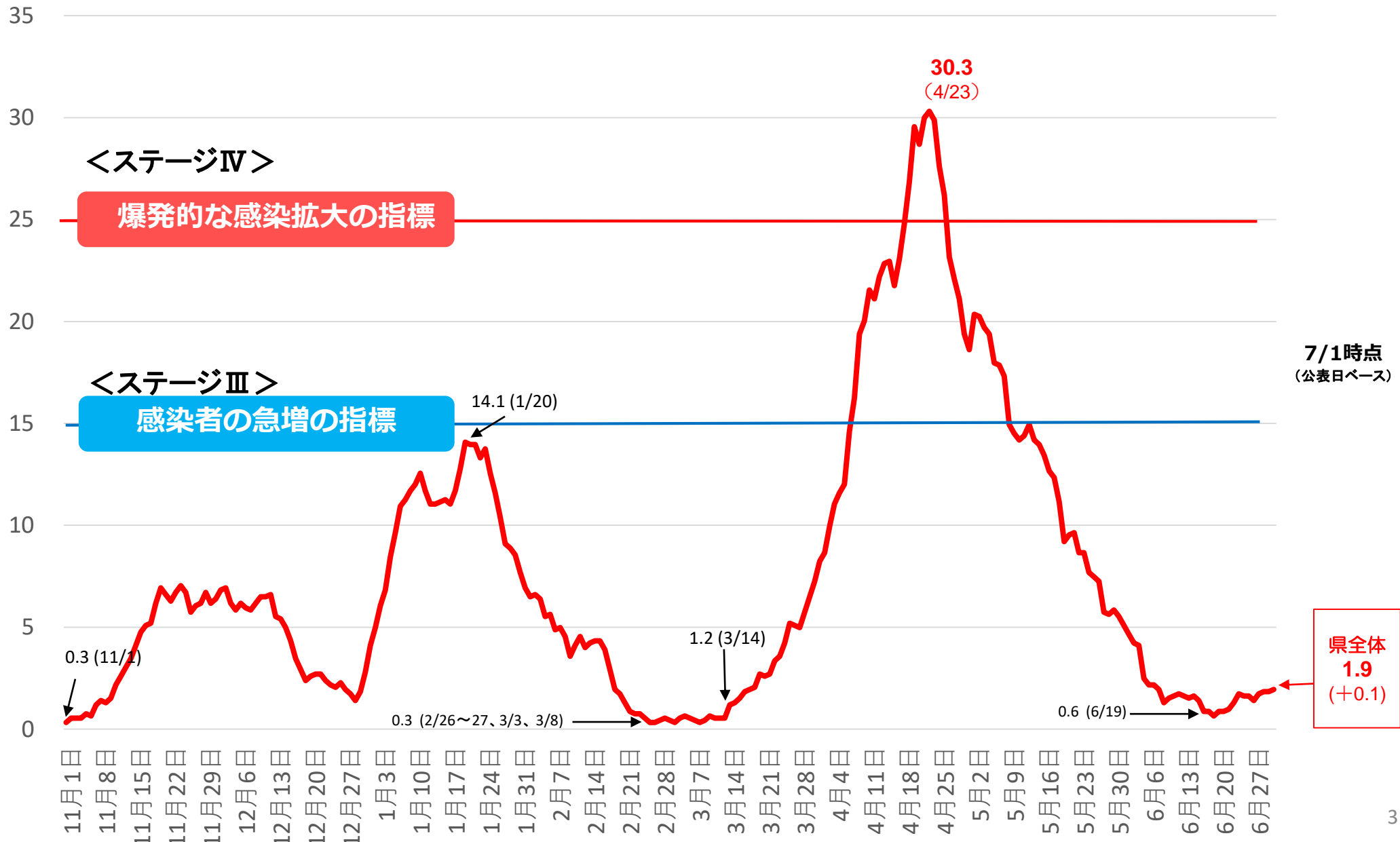
第二波

第三波

第四波



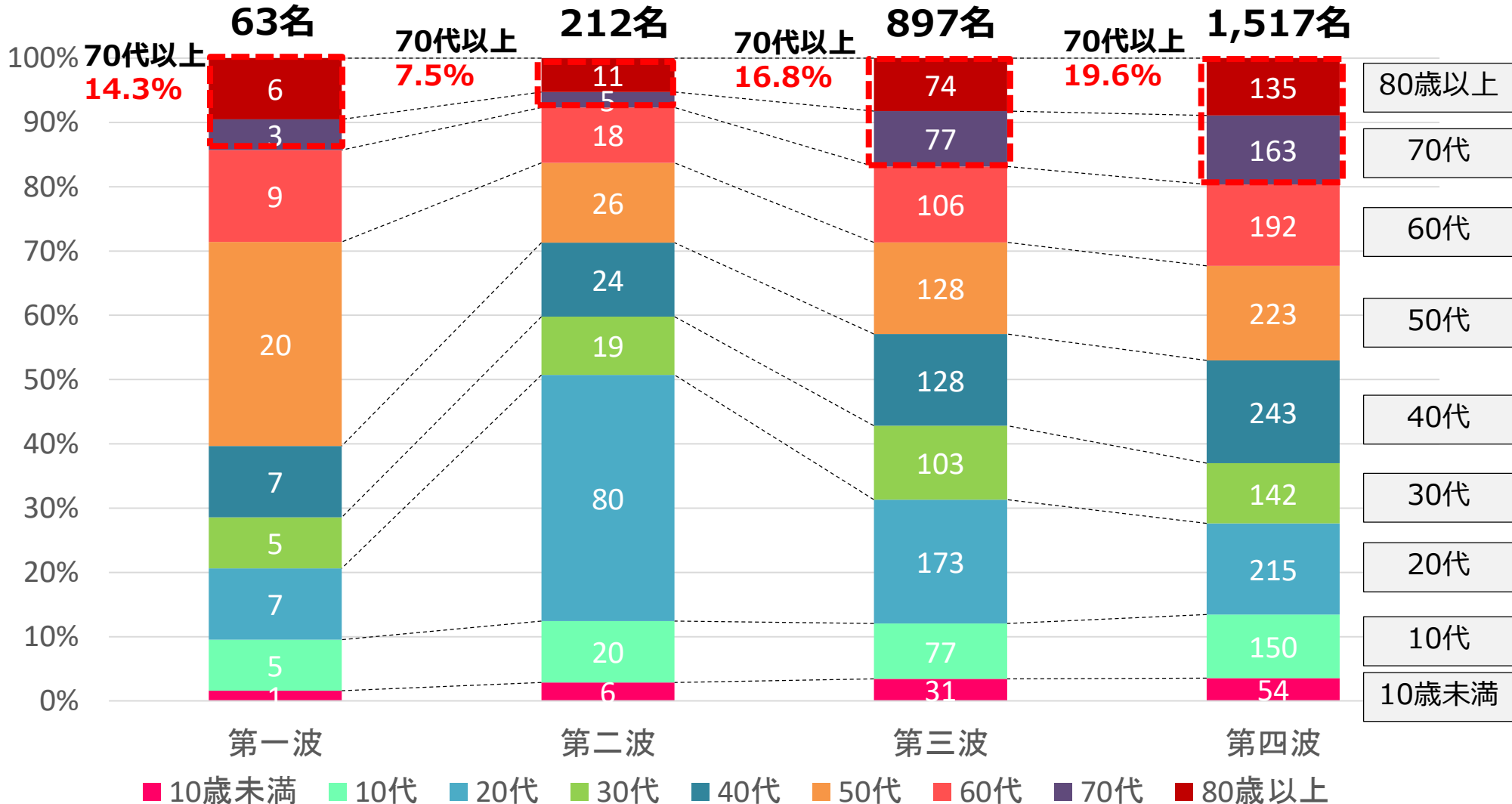
# 県内の感染者数の推移（1週間・人口10万人あたり）



# 県内の年齢別感染者数

(令和3年7月1日発表分まで)  
2,689名

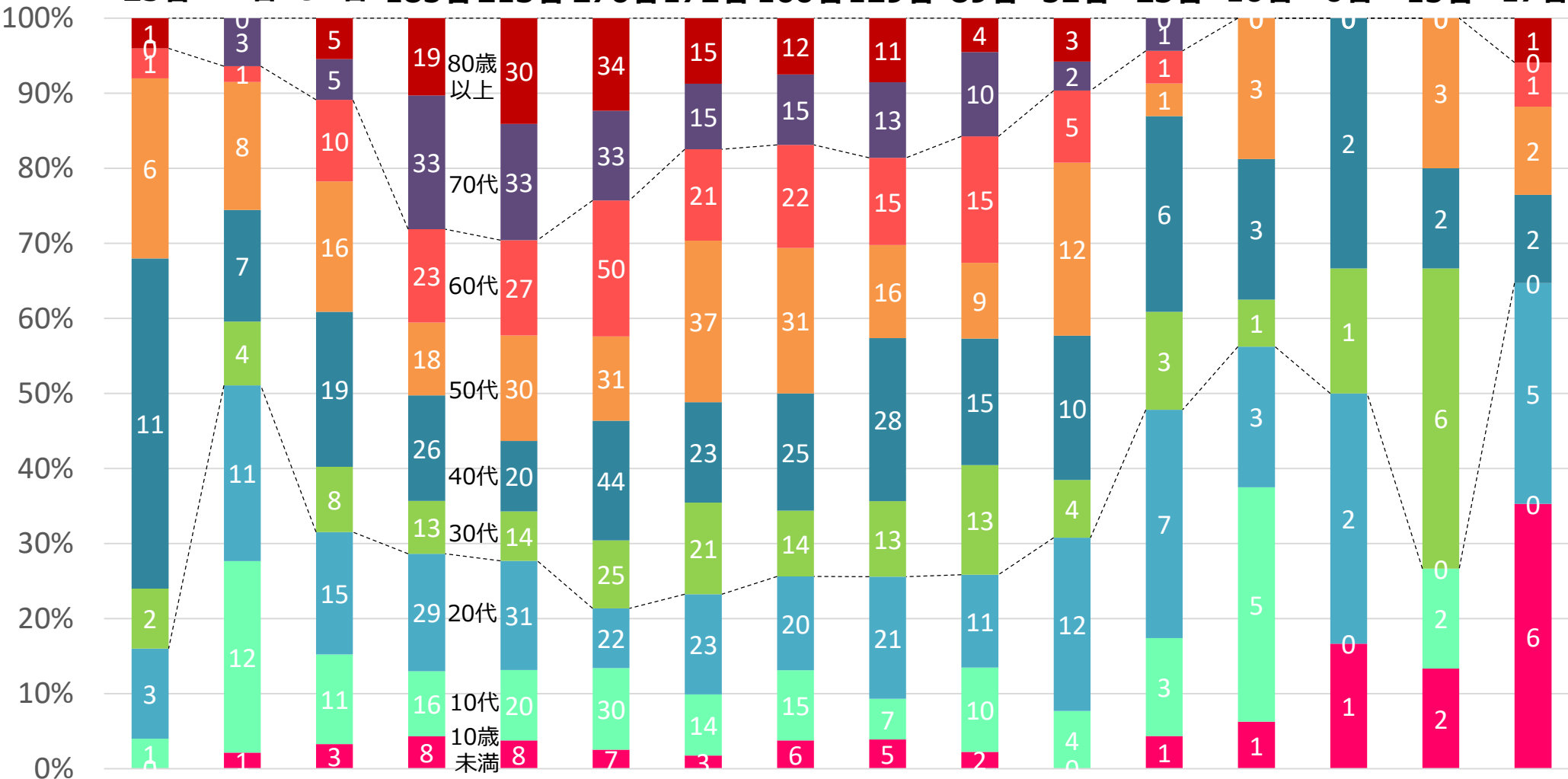
- 第一波では感染者の年代は50・60代が中心であったが、第二波では、20代以下の若者が中心となった。
- 第三波では、全年齢に感染が広がったが、特に高齢者と小児の患者数が増加している。
- 令和3年3月14日から始まった第四波においても、各年代に感染が広がるとともに、高齢者の割合が高くなっている。



# 県内の第四波の週別年齢別感染者数 (7月1日発表分まで)

第四波 1,517名

25名 47名 92名 185名 213名 276名 172名 160名 129名 89名 52名 23名 16名 6名 15名 17名

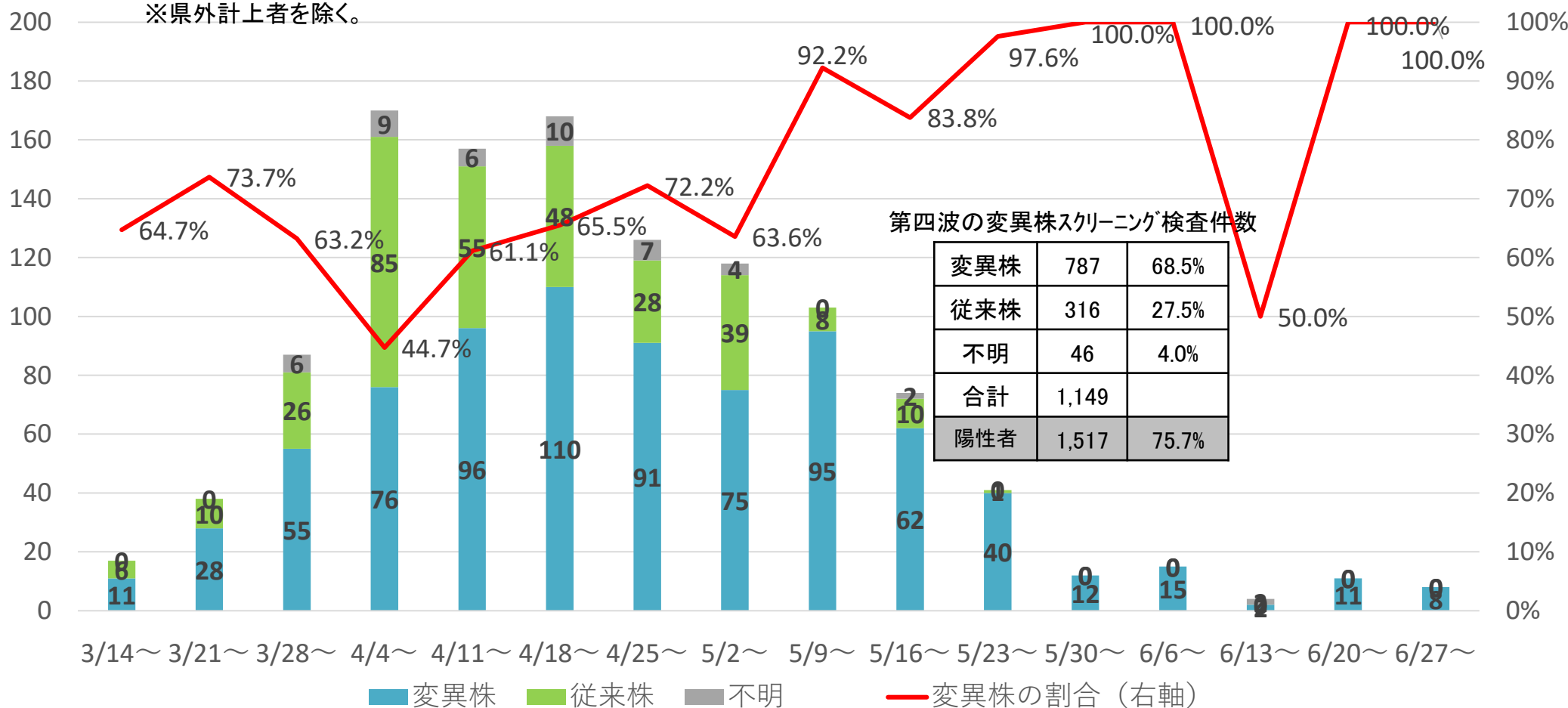


10歳未満 10代 20代 30代 40代 50代 60代 70代 80歳以上

# 変異株スクリーニング検査陽性者の発生状況（週次）

（令和3年7月1日発表分まで）

※県外計上者を除く。



	3/14～	3/21～	3/28～	4/4～	4/11～	4/18～	4/25～	5/2～	5/9～	5/16～	5/23～	5/30～	6/6～	6/13～	6/20～	6/27～
新規変異株判定数	11	28	55	76	96	110	91	75	95	62	40	12	15	2	11	8
累積変異株判定数	11	39	94	170	266	376	467	542	637	699	739	751	766	768	779	787

※PCR陽性判明後に別途変異株スクリーニング検査を行った件数。ただし、4月5日以降は家族等は全例の変異株検査を行っていない。

# 本県の酸素投与必要な重症者数の推移

令和3年7月1日現在

第一波

第二波

第三波

第四波

7月1日時点 1名

重症者数最大56名

重傷者割合

14.8% (4/23)

16.7% (4/28)

17.8% (4/30)

■ 重症者数

※ 本県において、重症には酸素投与を含む。

【第一波】  
重症者数最大4名  
(4/17,18)

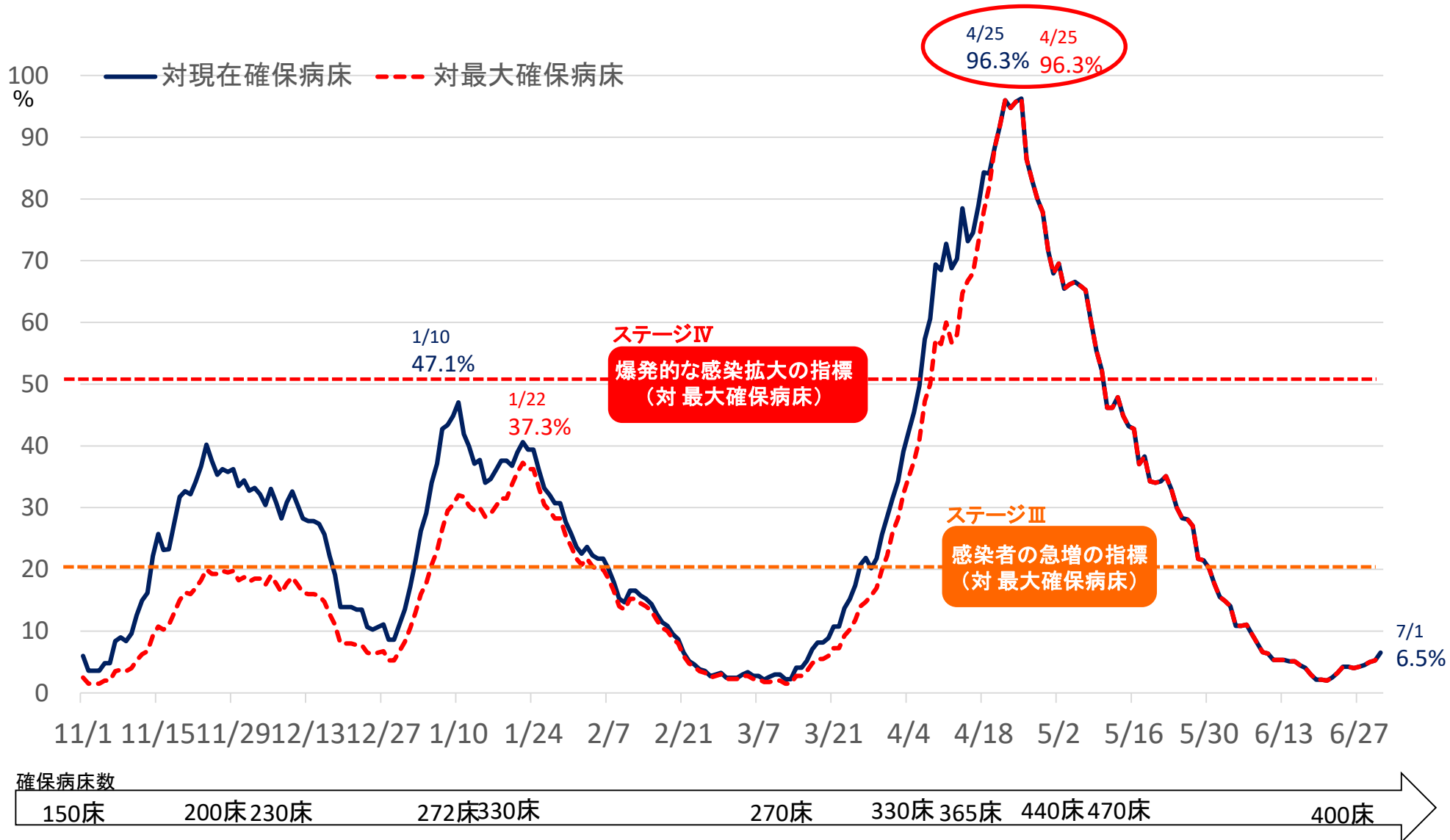
【第二波】  
重症者数最大5名  
(8/8,12)

【第三波】  
重症者数最大17名  
(1/24,27,28)





# 病床利用率の推移



※令和3年4月20日から確保病床数と最大確保病床数が一致。

※最大確保病床は、令和3年4月25日までは400床、4月26日～29日は420床、4月30日～5月10日は440床、5月11日～6月20日は470床、6月21日以降は400床。

# 第四波の状況

(令和3年3月14日～5月31日)

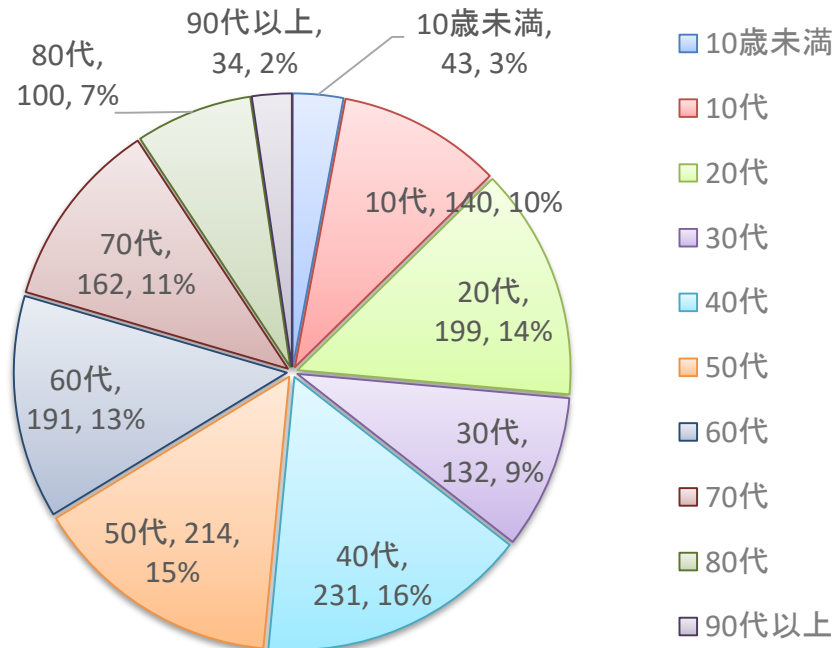
# 感染経路等

# 第4波の感染状況

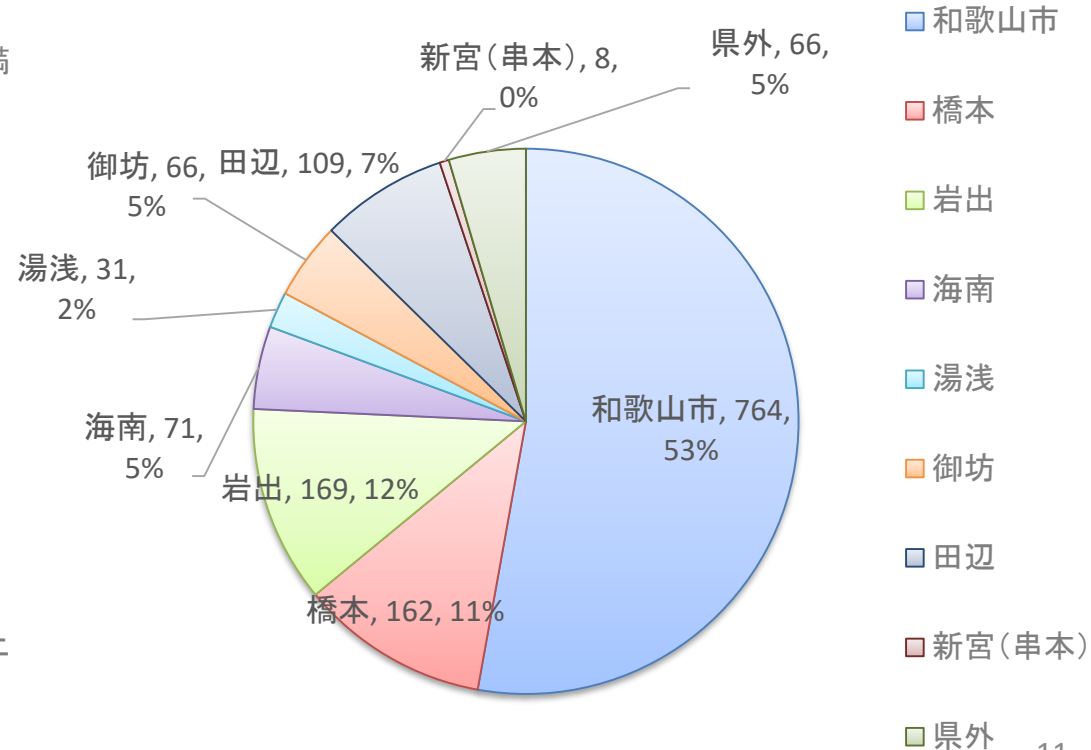
(3/14~5/31公表分) n=1446例

- 年代別では、40代が最も多く、40代以下で半数を占めている。70代以上の高齢者は約23%となっている。
- 保健所別では、和歌山市が最も多く、約半数を占めている。次いで、岩出、橋本、田辺、海南となっている。なお、人口当たりでは、和歌山市が最も多く、次いで橋本、岩出、海南となっている。

## ① 年代別



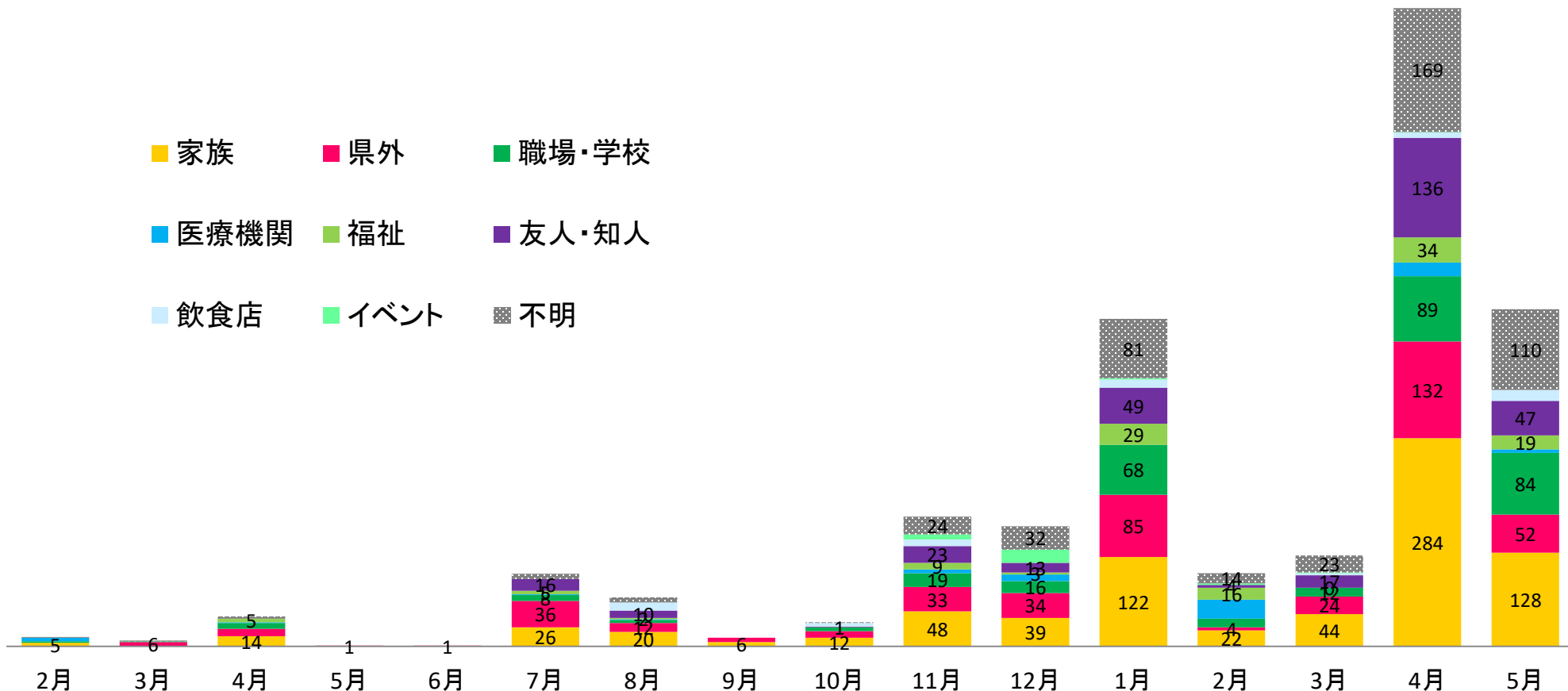
## ② 保健所別



※県外で計上された数は除く

# 感染者の感染経路

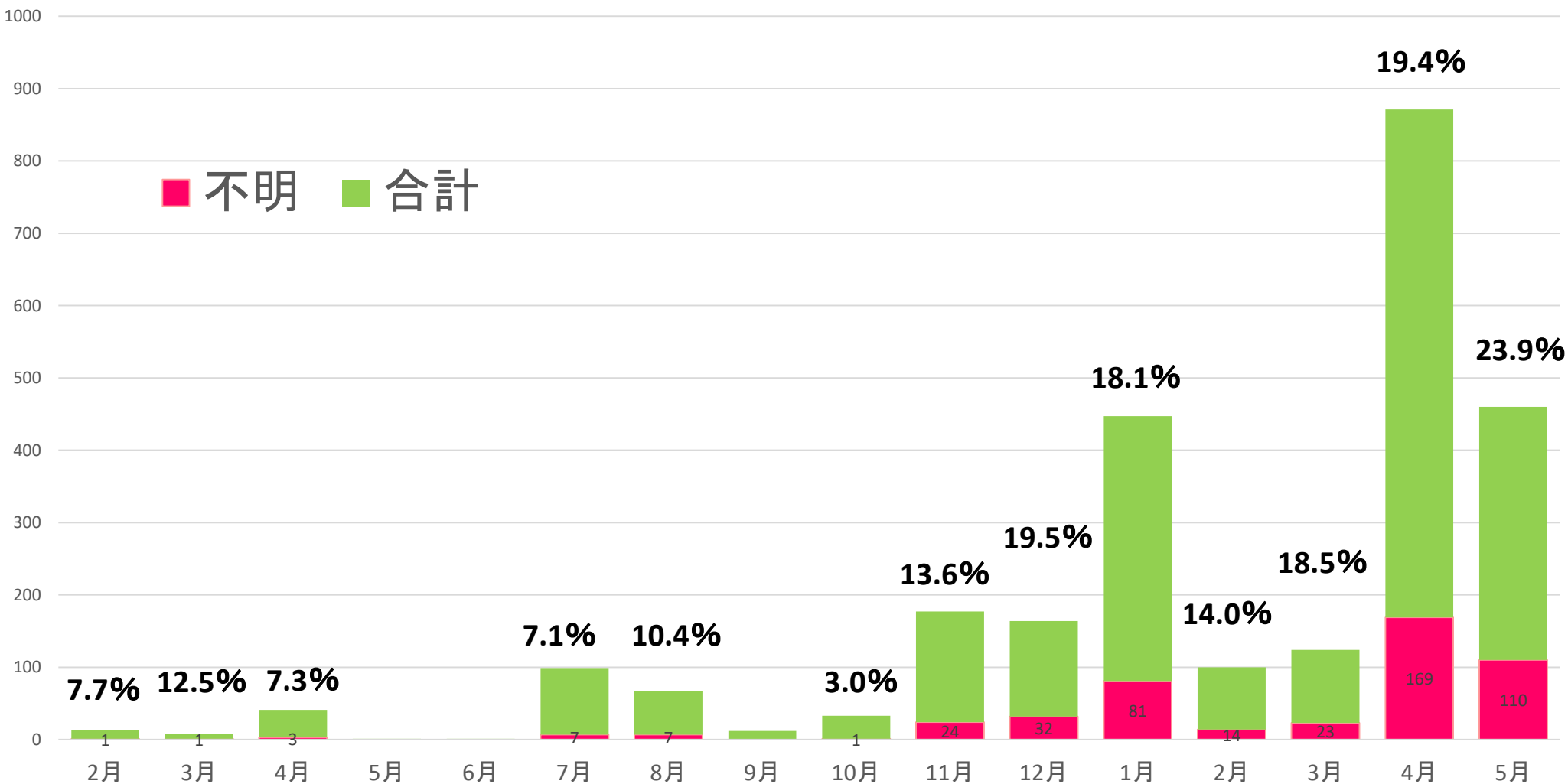
- 本県では、第一波の2020年2月に院内感染で始まり、3月から県外の持ち込みが多くなり、第二波の2020年7月には県外からの持ち込みが感染経路として最も多くなった。
- 第三波の始まった11月以降では、家族内感染や以前として、県外からの持ち込みが多い。
- 1月には、帰省等の影響により、県外からの持ち込みが家族内感染となり感染者数が増加した。
- 第四波は2021年3月14日から始まり、4月に感染者数が急増した。4月、5月の感染経路は共に、家族内感染に次いで感染経路不明が増加した。



※県外で計上された数は除く

# 感染経路（原因不明の割合）

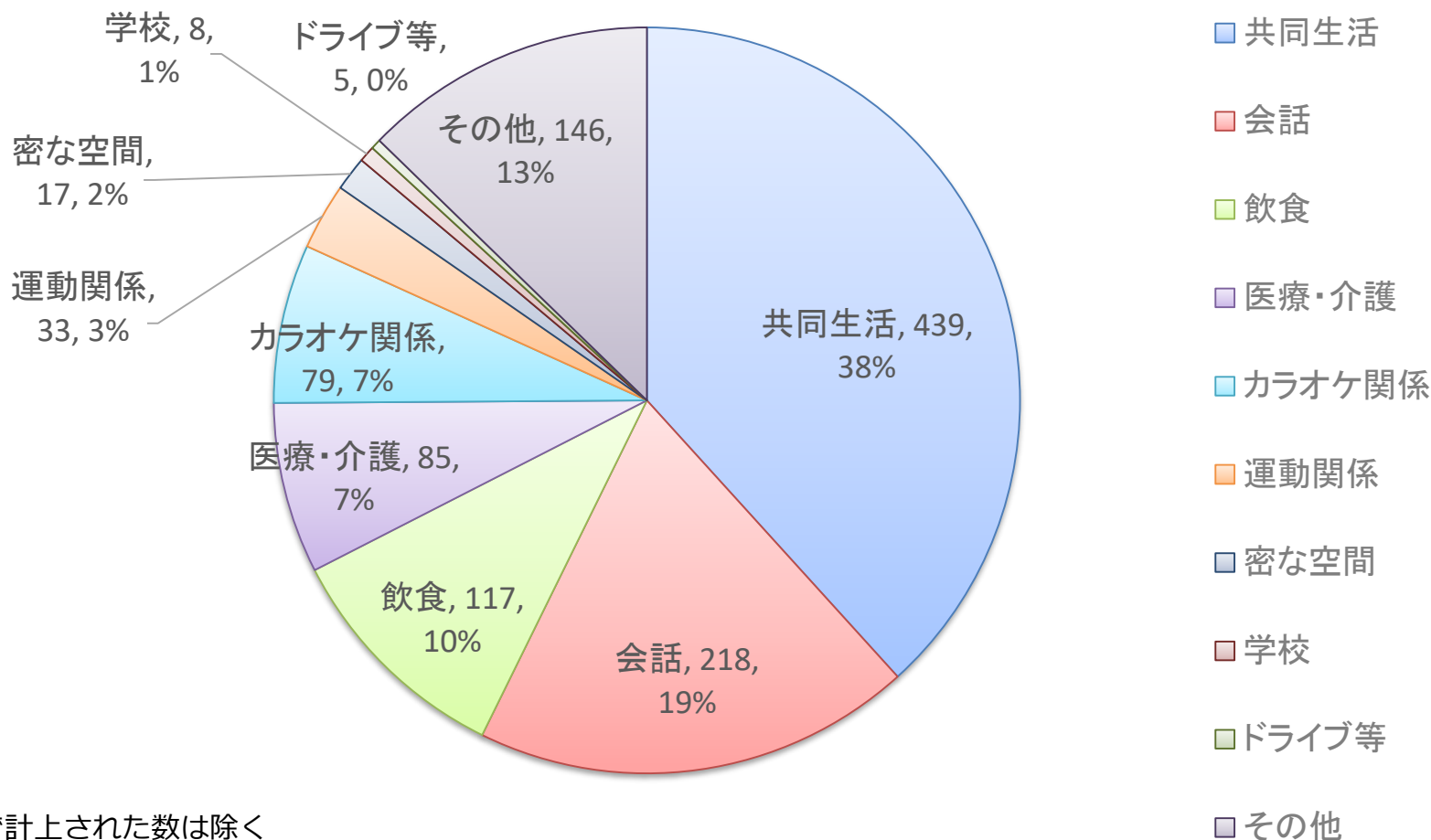
○ 第三波の始まった11月以降から、徐々に感染経路不明の割合が高くなっている。12月から5月にかけて感染経路不明の割合は高いまま経過しており、5月は23.9%と過去最高となった。



※県外で計上された数は除く

# 感染者の推定される感染機会 (3/14~5/31公表分) n=1147例 (感染源不明299例を除く)

- 第四波が始まった3月14日から5月31日までの県内感染者のうち感染源不明を除いて推定される感染の機会を見た。
- 家族等と同居生活をしている場合が最も多く、次いで会話、飲食、医療・介護、カラオケと続いた。
- 従って、家族（同居）内で共有する空間・場所・物を介する感染予防と飲食時の感染予防に最も注意する必要がある。また、屋内でのマスク着用、ディスタンスの保持・3密の回避、換気が重要である。



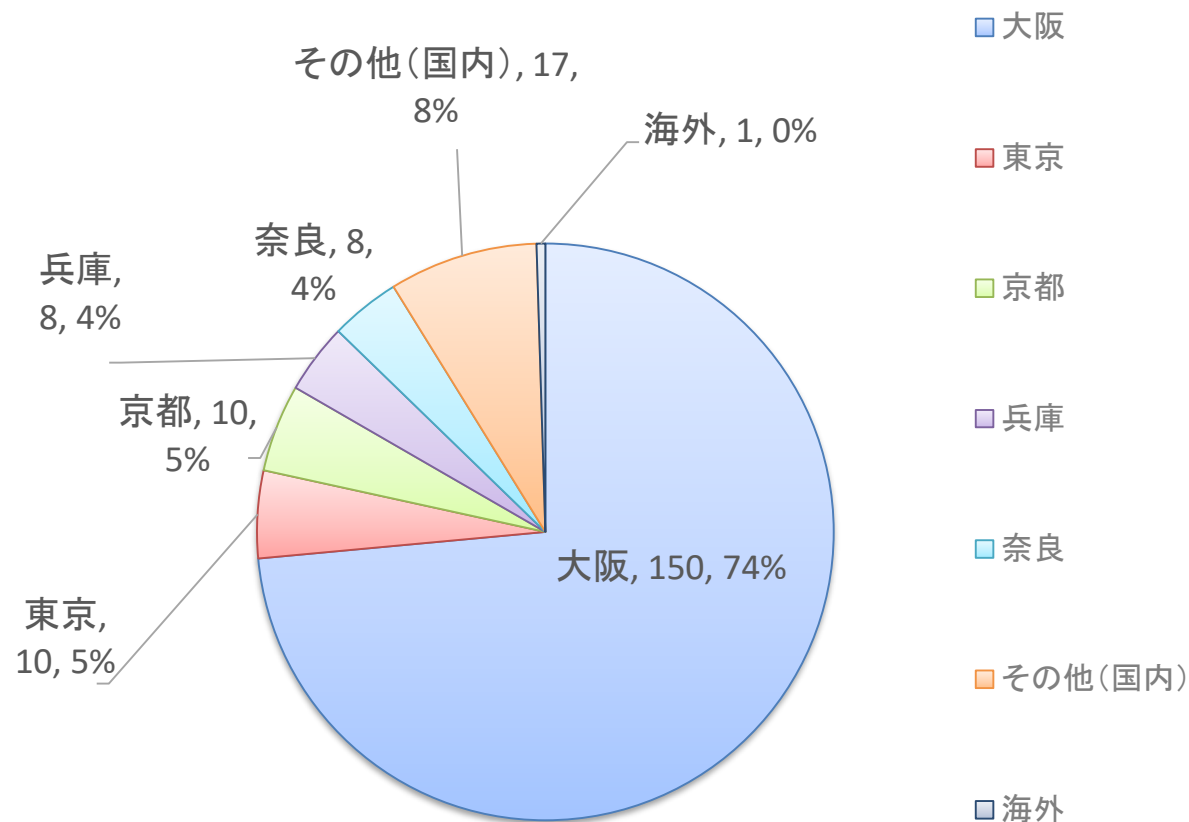
※県外で計上された数は除く

# 感染者の推定される感染経路 (3/14~5/31公表分) n=1147例 (感染源不明299例を除く)

- 県外に行かれて感染したまたは、県外の人との接触による感染と推定される者は204例で、全体の約18%であった。
- 都道府県別にみると、大阪が最も多く、150例で県外例の約74%を占めている。次いで、東京、京都であり、関西圏が約9割を占めている。また、海外は1例あった。

## ③ 都道府県別

推定感染経路  
「県外」204例



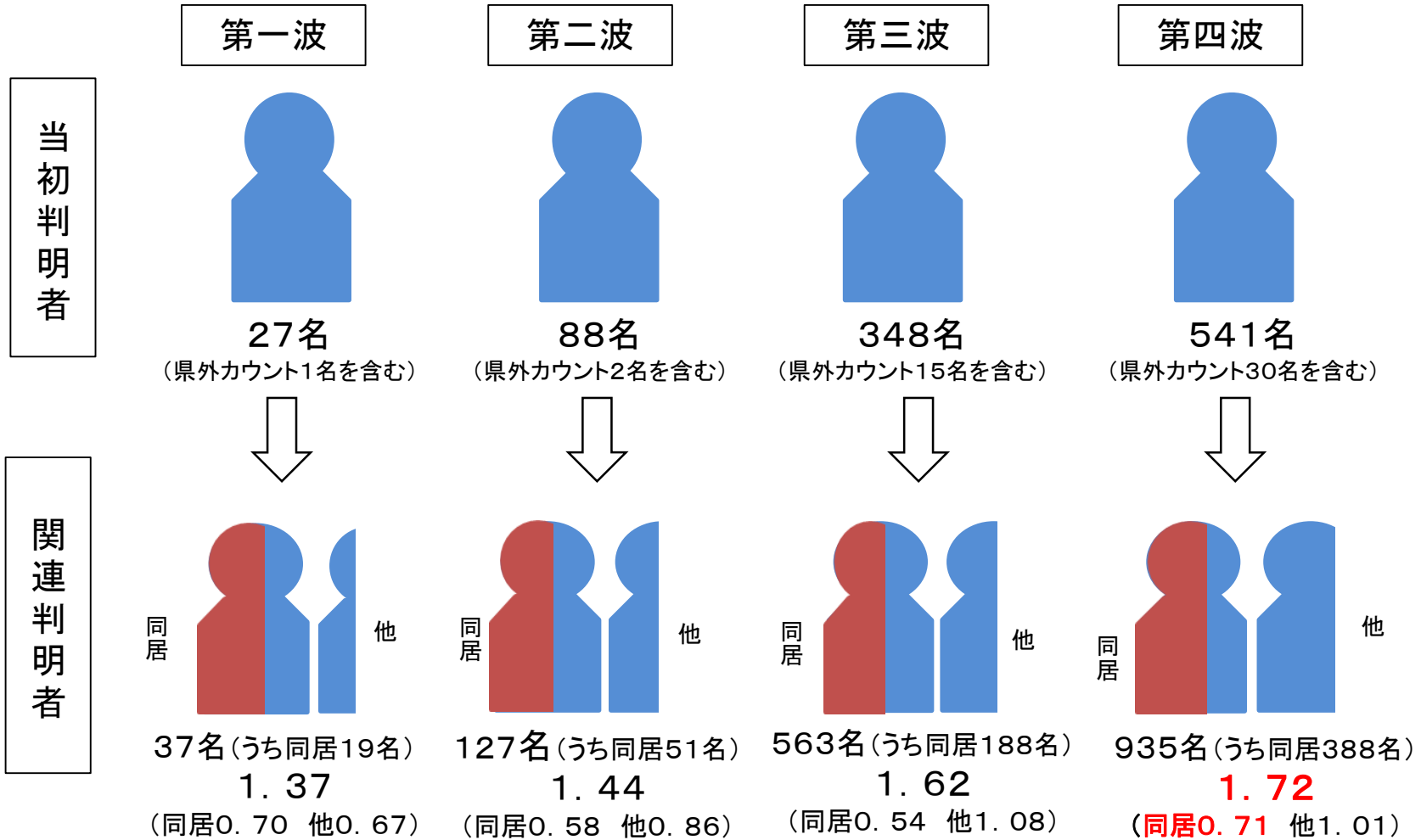
※県外で計上された数は除く



# 感染性

# 濃厚接触者等の感染状況

(令和3年5月31日時点)



主な  
クラスター  
・  
件数

- ・ 病院
- ・ 学校

計3件

- ・ デイサービス
- ・ ダイニングバー

計4件

- ・ 販売イベント
- ・ 病院
- ・ 高齢者施設

計20件

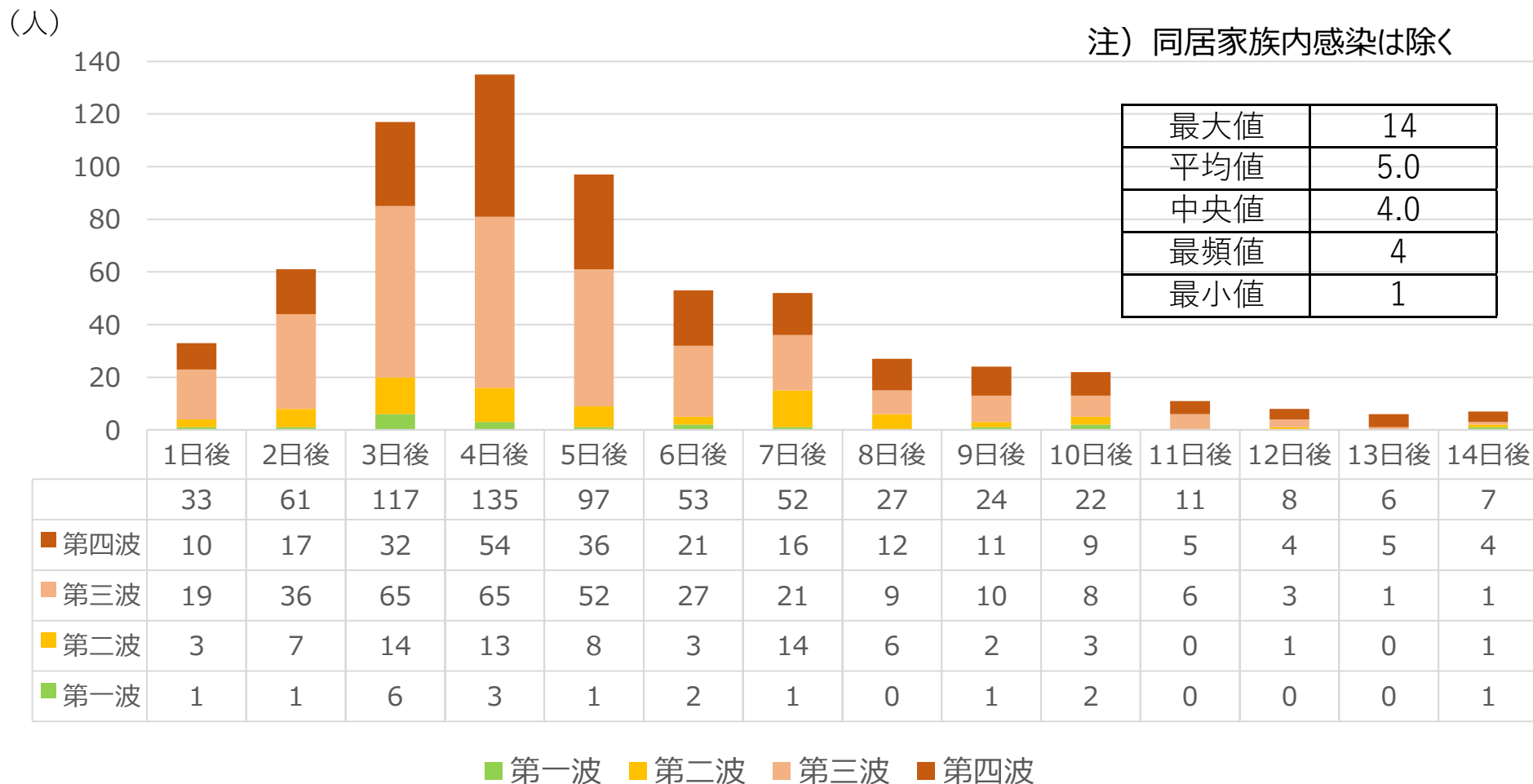
- ・ カラオケ
- ・ 飲食会

計31件

※当初判明者の発表日により分類

# 新型コロナウイルス感染者の曝露を受けてからの発症日（推定）

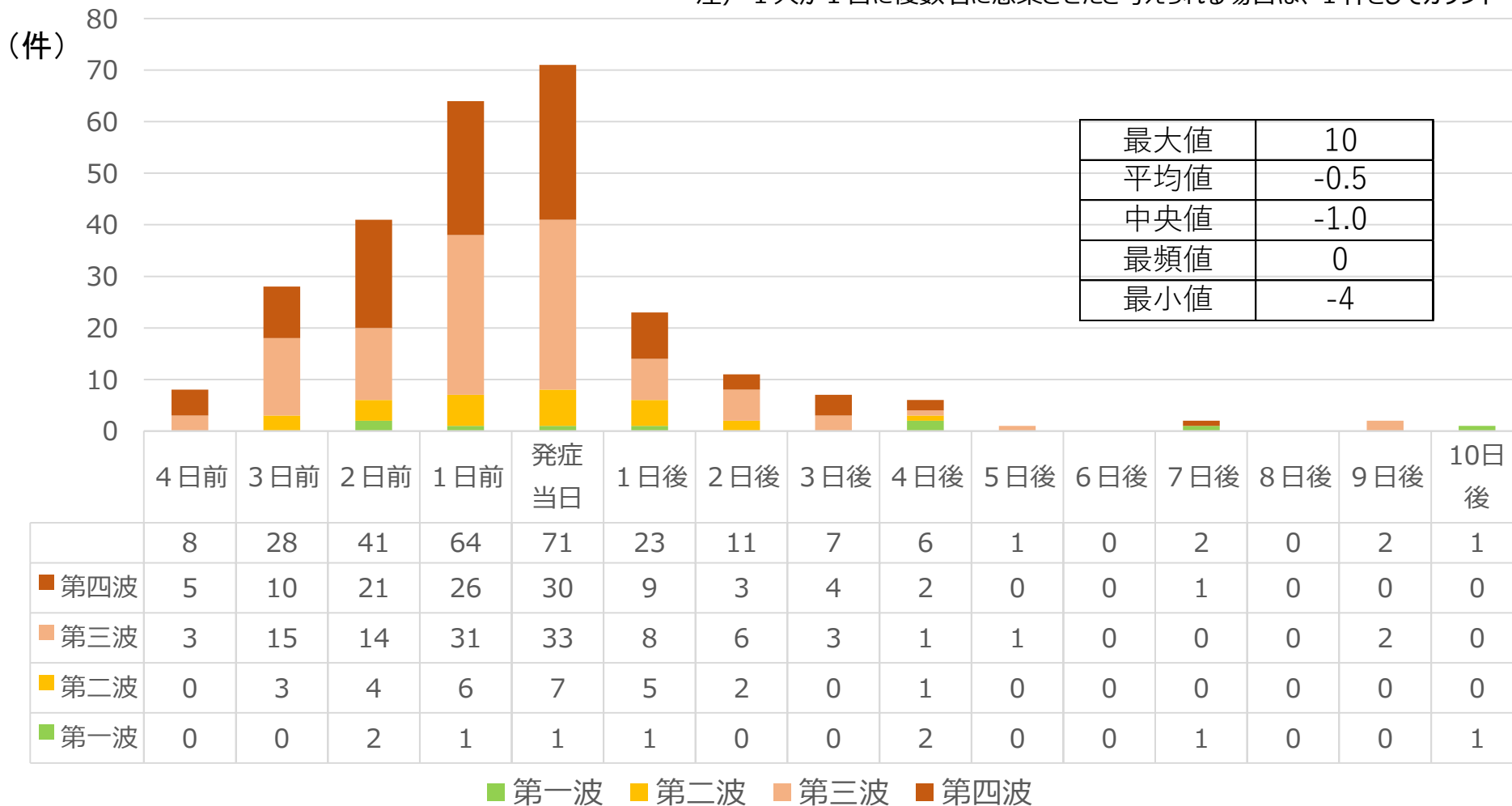
- 新型コロナウイルス感染症の患者が曝露後何日後に発症しているかをみた。曝露が推定された対象者653人についてみると、曝露4日後が最も多く、中央値4日後、平均値5日後であった。最小は曝露1日後であり、最大は曝露14日後であった。84%は曝露後7日後以内であり、ほとんどは曝露10日後以内であった。なお、同居家族は曝露日の特定ができないことから対象から除外している。発症は時間単位での特定はできていない。発症 = 発熱としていない。
- 曝露11日後以降が第三波で11人、第四波では18人いた。



# 新型コロナウイルス感染者が他者に感染させたと推定されるタイミング（推定）

- 新型コロナウイルス感染症の患者265人について発症の何日目に他者に感染させたかをみた。発症当日が最も多く、中央値は発症1日前で、平均値は0.5日前、最小は発症4日前で、最大は発症10日後となっていた。なお、感染者1人が同日に複数の人に感染させた場合は1件とカウントしている。発症は時間単位での特定はできていない。発症 = 発熱としていない。
- 発症4日前が第三波で3件、第四波では5件あったことから、感染者との接触状況を十分考慮して積極的に検査することが重要。

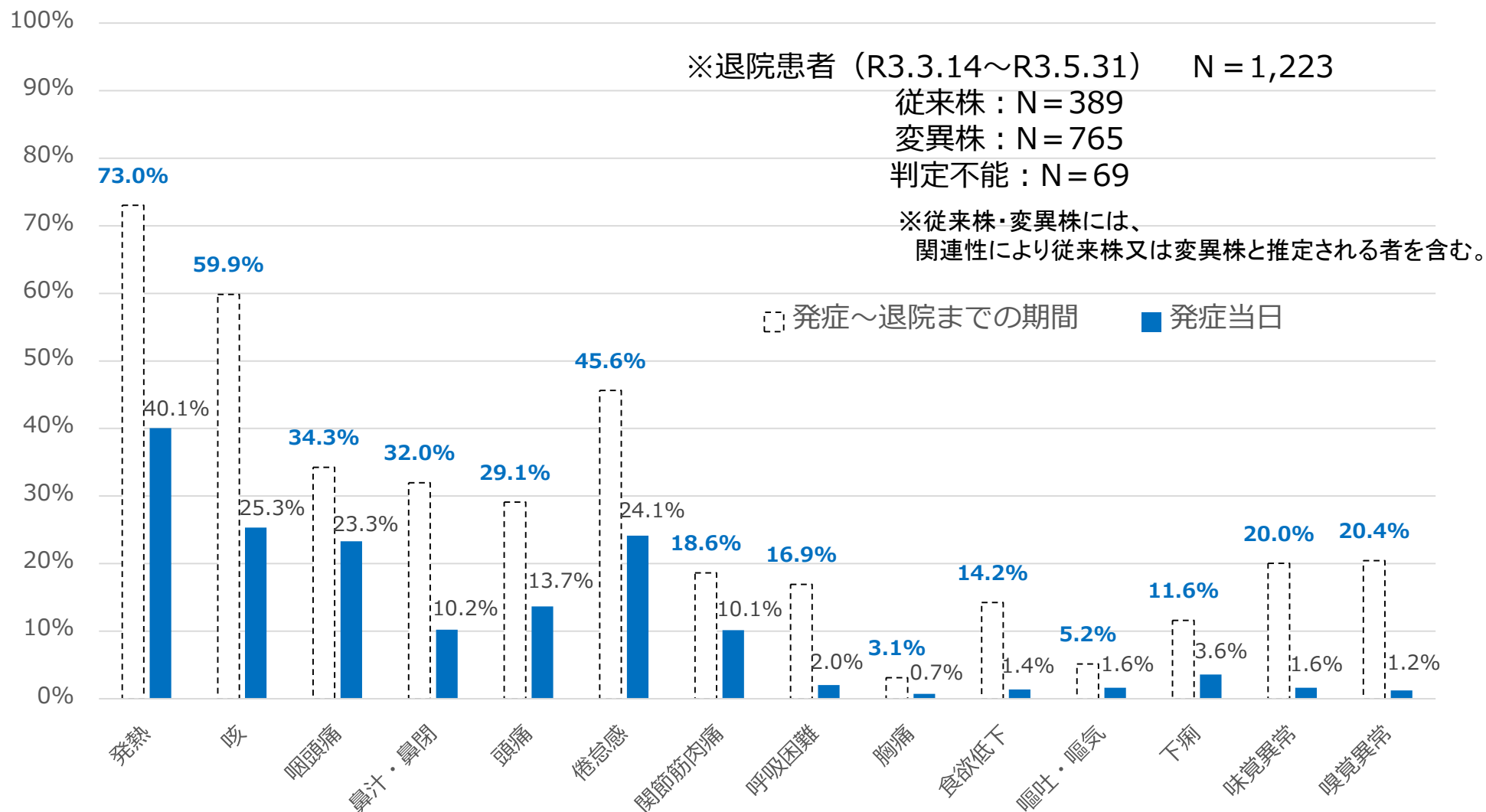
注) 1人が1日に複数名に感染させたと考えられる場合は、1件としてカウント



# 症状

# 症状のあった退院患者の初発症状と経過（全体）

- 令和3年3月14日から5月31日までの退院患者の初発症状と入院後の症状について見た。
- 初発症状は、発熱・咳・咽頭痛・倦怠感が多かった。発熱は約4割にあったが、一方、6割は発熱がないことから注意が必要である。その後の経過中には発熱は約7割に見られた。



# 株別 退院患者の初発症状

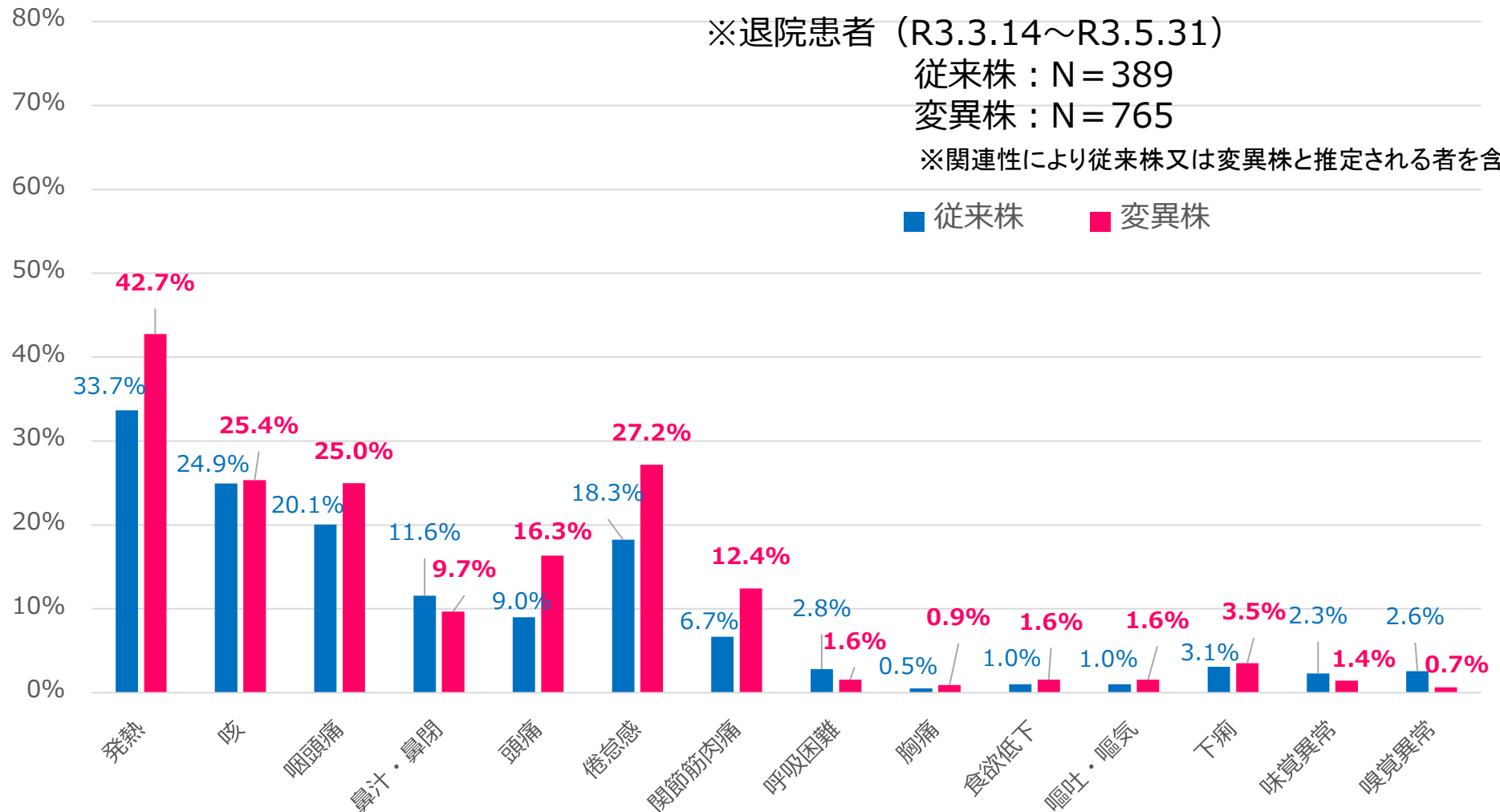
- 退院された感染者の初発症状について、変異株の感染者は、従来株より、発熱、咳、咽頭痛、全身倦怠感、頭痛、関節筋肉痛が多く見られた。また、下痢、食欲低下、嘔気・嘔吐も多かった。一方、嗅覚異常は、従来株の方が多かった。

※退院患者 (R3.3.14~R3.5.31)

従来株 : N = 389

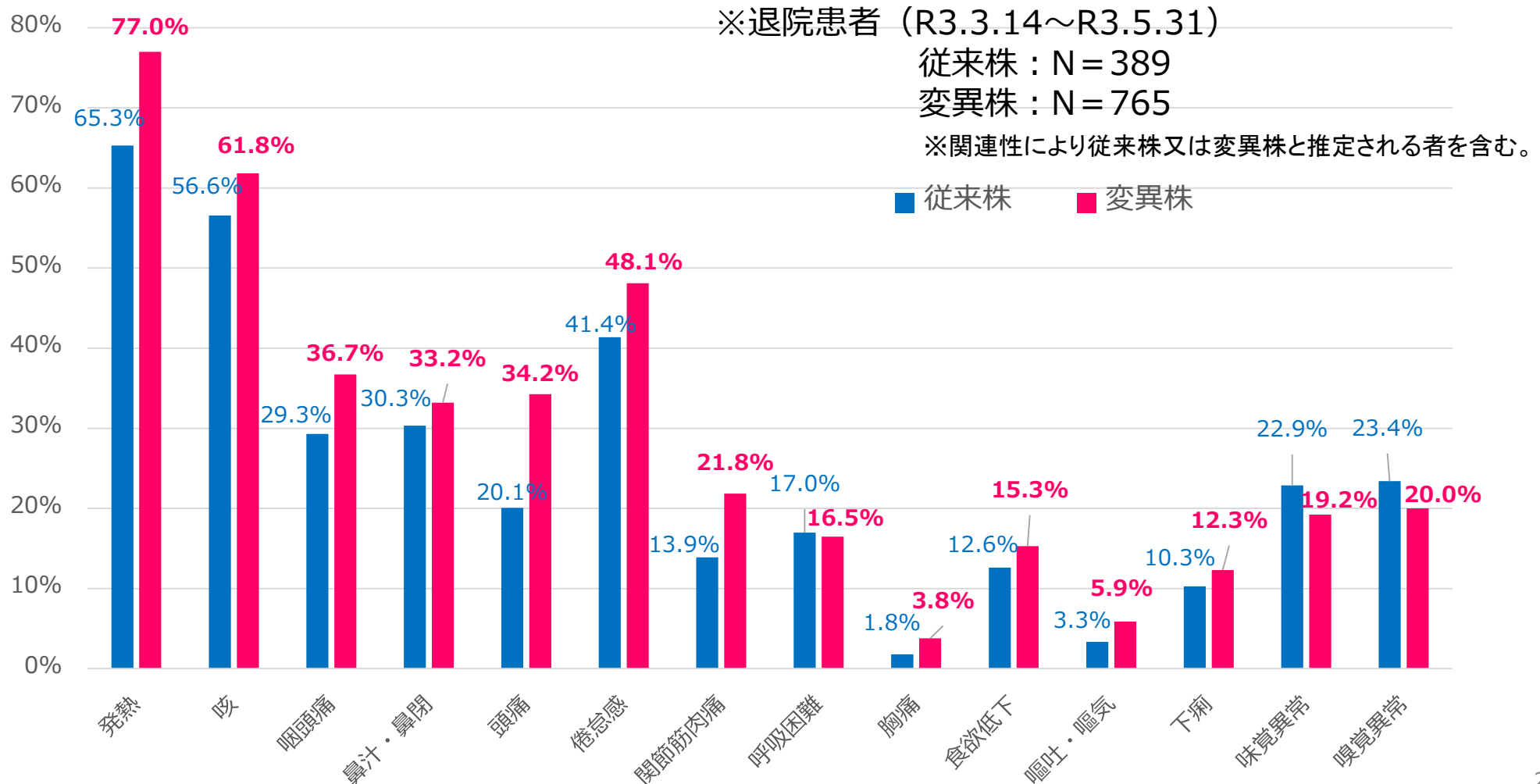
変異株 : N = 765

※関連性により従来株又は変異株と推定される者を含む。



# 株別 退院患者の発症～退院までの症状

○ 退院された感染者の発症から退院までの症状について、変異株の感染者は、従来株より、発熱、咳、咽頭痛、全身倦怠感、頭痛、関節筋肉痛等が多く見られた。胸痛、食欲低下、下痢も多かった。一方、味覚・嗅覚異常は、ほぼ同じであった。

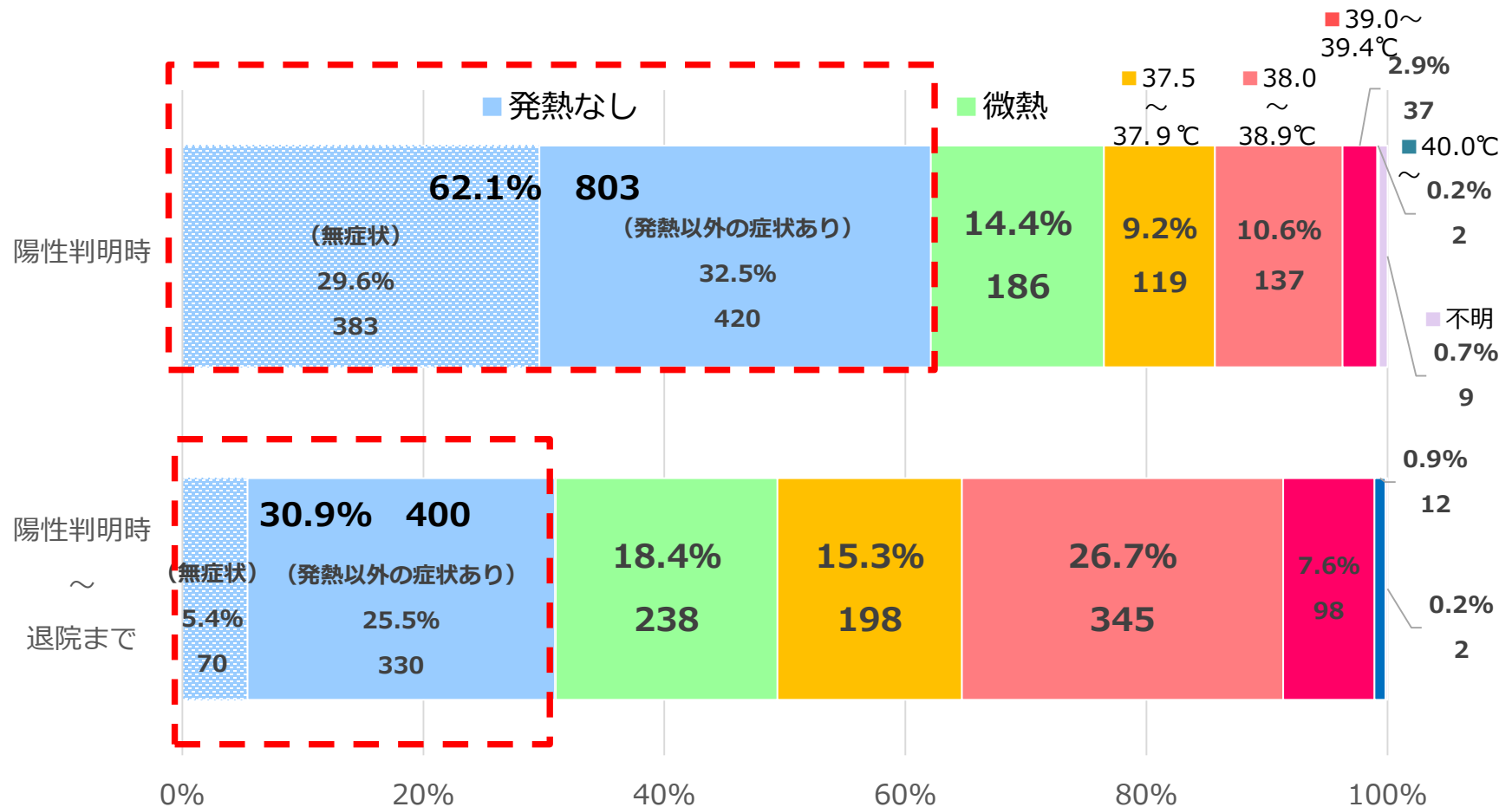




# 新型コロナウイルス感染者の最高体温

※退院患者（R3.3.14～R3.5.31）N=1293

- 陽性判明時には、発熱が無い人が60.6%であり、微熱の人も入れると76.5%であった。
- 経過中には、症状が出て発熱する人が増えたが、37.5度以上は50.6%で、38度以上は35.3%であった。また、入院中も含め、発熱がない人は30.2%であった。



# 重症度

# 退院患者の陽性判明時症状と入院後症状 (n = 1,293)

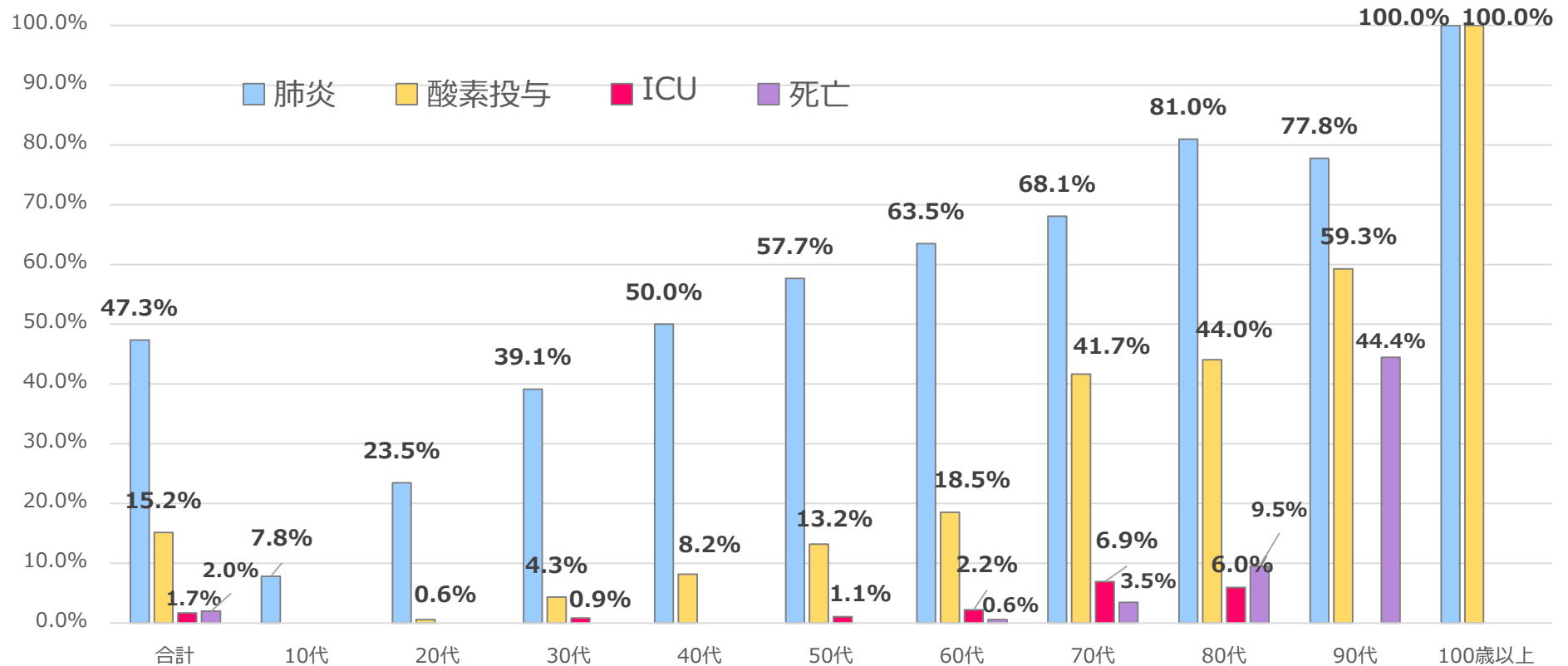
- 陽性判明時無症状であった383人のうち、退院まで無症状のままであった者は70人（約18.3%）であり、肺炎以上の重症度となったのは152人（約39.7%）であった。※退院患者（R3.3.14～5.31）
- 全経過で、無症状5.4%、軽症47.3%、肺炎・酸素不要32.2%、肺炎・酸素必要15.2%であった。ICU入室者は1.7%、致死率は2.0%であった。高齢者で積極的な治療を希望されない場合は、ICUに入室せずに治療がされているため、国基準の重症者は少なくなっていると思われる。

当初症状	入院後症状	合計	乳児	幼児	10歳未満	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	90代	100歳以上	
無症状	無症状	70	1	4	5	12	9	5	11	7	5	8	3			
	軽症	161		6	8	39	21	18	21	13	15	16	3	1		
	肺炎	重症（酸素投与）	152				2	8	11	30	22	26	22	23	8	
		重症（ICU）	31							1	1	5	8	11	5	
		重症（ICU）	5									1	2	2		
	死亡	6										2	2	2		
		383	1	10	13	53	38	34	62	42	46	46	29	9	0	
有症状	軽症	450	3	5	7	67	107	47	72	60	45	22	10	5		
	肺炎	重症（酸素投与）	460				8	34	34	74	87	87	76	45	13	2
		重症（ICU）	165					1	5	16	24	28	52	26	11	2
		重症（ICU）	17						1		2	3	8	3		
	死亡	20									1	3	6	10		
		910	3	5	7	75	141	81	146	147	132	98	55	18	2	
合計		1293	4	15	20	128	179	115	208	189	178	144	84	27	2	

# 年代別 肺炎患者の症状経過 (n = 612)

※退院患者 (R3.3.14~R3.5.31)

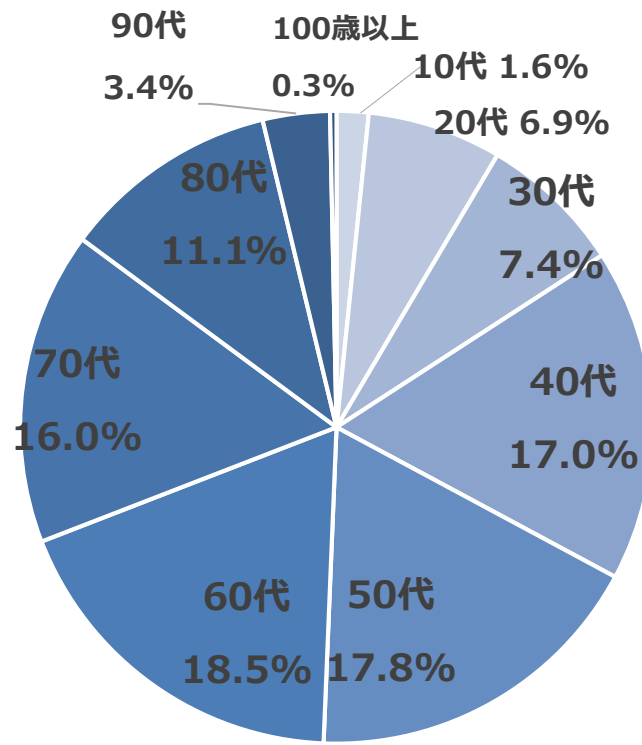
入院後症状		合計	乳児	幼児	10歳未満	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	90代	100歳以上
肺炎		612				10	42	45	104	109	113	98	68	21	2
	重症 (酸素投与)	196					1	5	17	25	33	60	37	16	2
	重症 (ICU)	22						1		2	4	10	5		
	死亡	26									1	5	8	12	



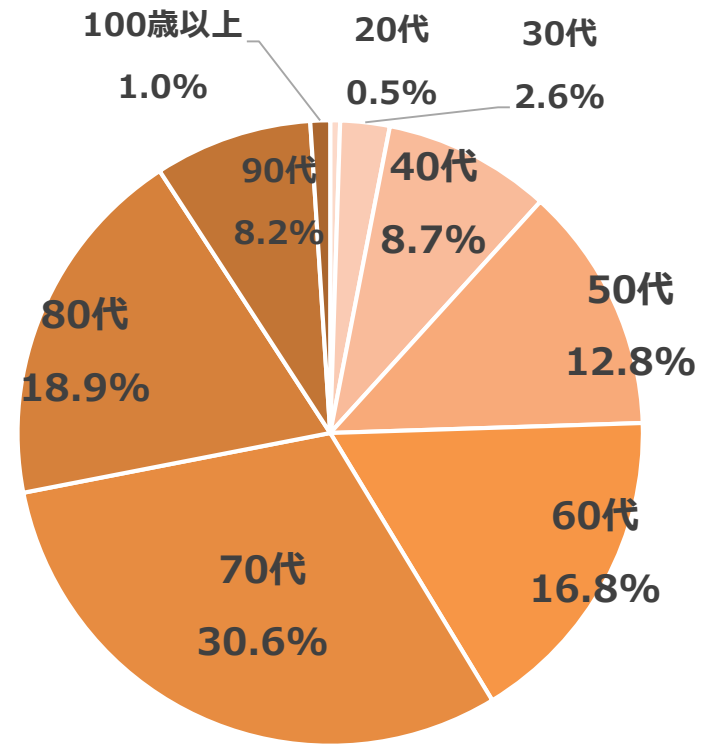
# 肺炎患者と酸素投与患者の年代別割合

※退院患者（R3.3.14～R3.5.31）

- 肺炎を併発した陽性者は、全年齢のうち40歳以上で約84%を占めていた。60代が最も多かった。10代以下は肺炎の併発も極めて少ない。
- そのうち、酸素投与が必要な者は、ほとんどが40歳以上であった。30代以下では、酸素投与が必要な者は少ない。



肺炎患者の年代別割合  
N=612



酸素投与患者の年代別割合  
N=196

# 新型コロナウイルス感染者の経過 (n=1,293)

※退院患者 (R3.3.14~R3.5.31)

- 新型コロナウイルス感染症で入院し、退院した患者1,293名 (R3.3.14~5.31) の経過からみると、全経過で、無症状5.4%、軽症47.3%、肺炎・酸素不要32.2%、肺炎・酸素必要15.2%であった。ICU入室者は1.7%、致死率は2.0%であった。高齢者で積極的な治療を希望されない場合は、ICUに入室せずに治療がされているため、国基準の重症者は少なくなっていると思われる。

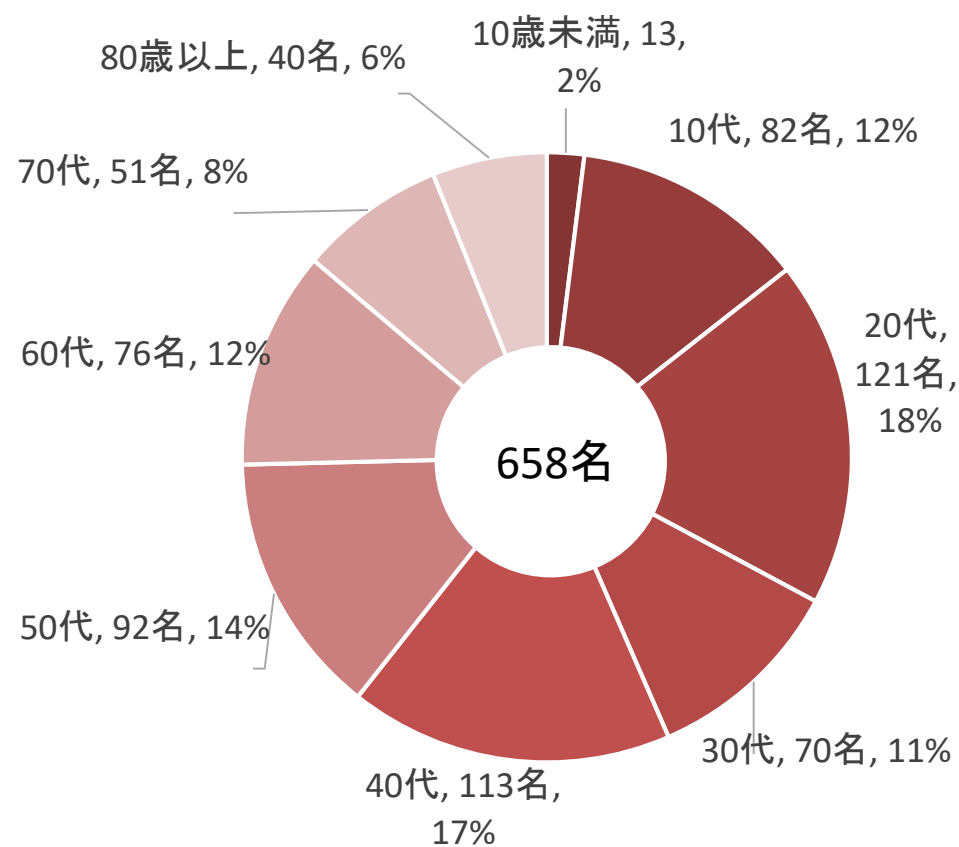
	全体	無症状	軽症	肺炎	酸素			
					なし	あり	ICU	死亡
人数	1293	70	611	612	416	196	22	26
%	100.0%	5.4%	47.3%	47.3%	32.2%	15.2%	1.7%	2.0%

# アルファ変異株と従来株の比較

# 変異株と従来株の年齢構成の比較

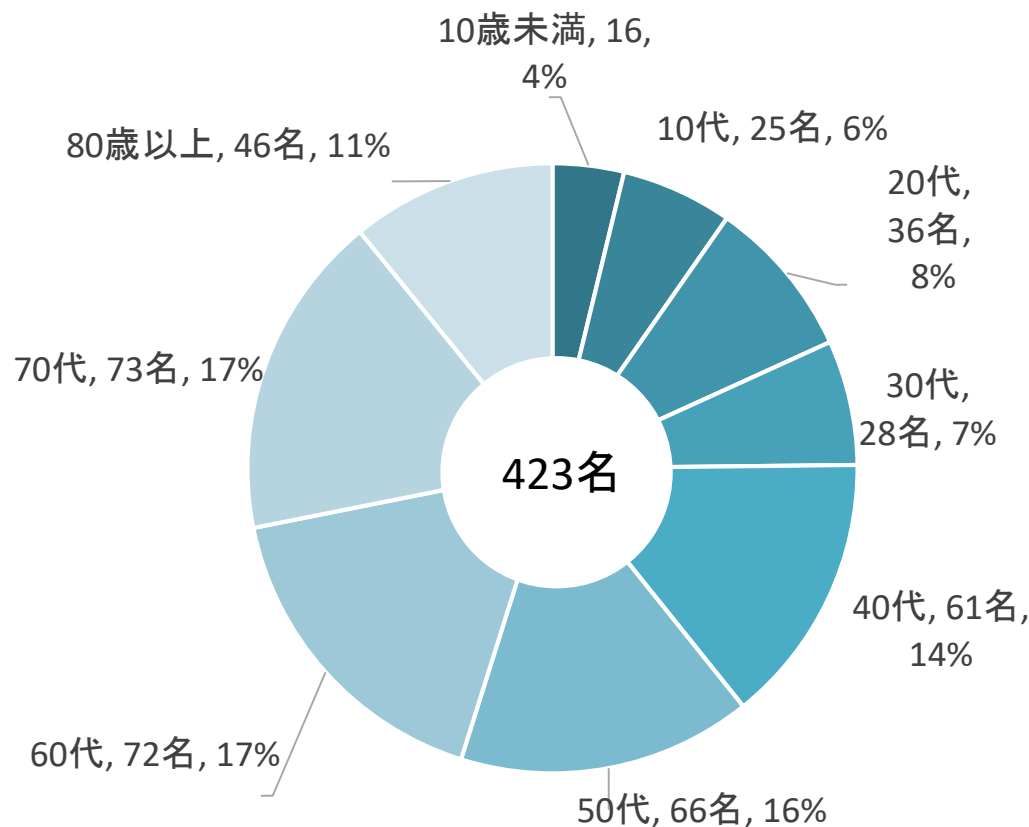
## ①変異株

(令和3年3月14日に発表し、5月31日までに退院(死亡含む)陽性者のうち、変異株スクリーニング検査で変異株と判定された**658名**の内訳)



## ②従来株

(令和3年3月14日に発表し、5月31日までに退院(死亡含む)した陽性者のうち、従来株と判定された者及び関連の陽性者合計**423名**の内訳)

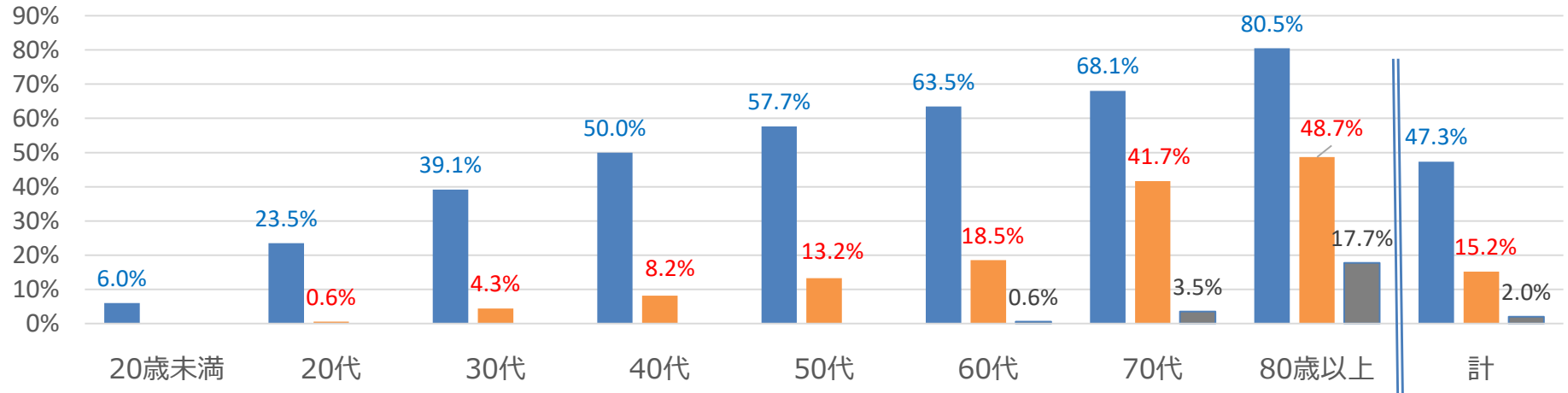




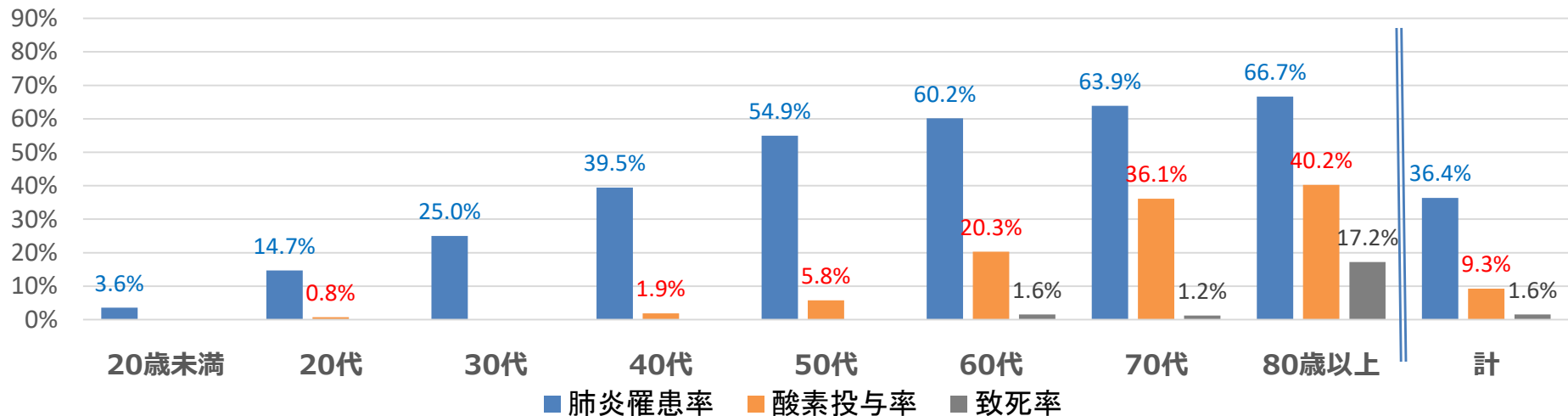
# 県内の年代別肺炎併発率等重症割合

県内カウントのみ

## ①第4波(令和3年3月14日～令和3年5月31日 n=1,293)

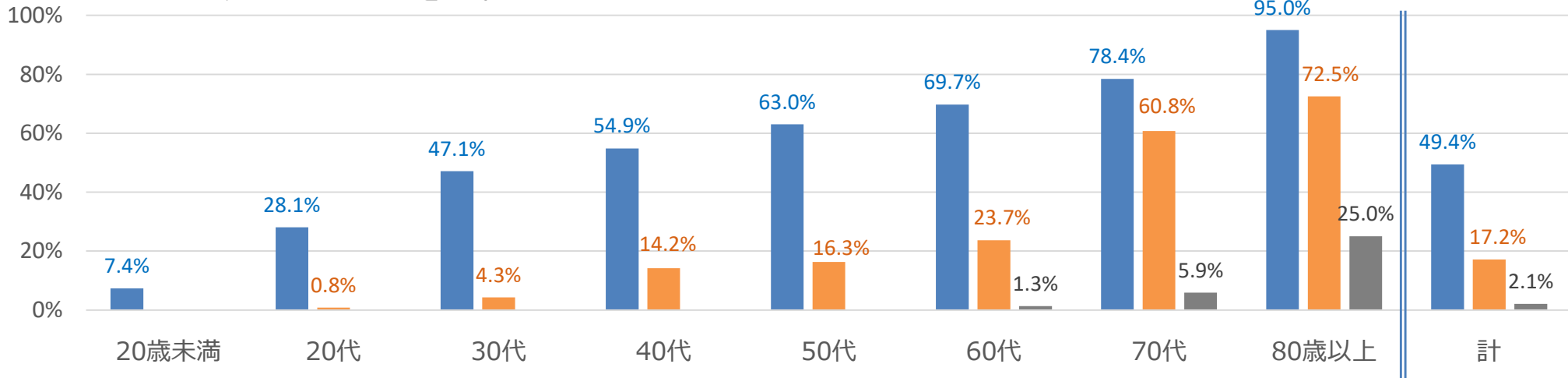


## ①第1波～第3波の一部(令和2年2月13日～令和3年2月15日 n=1151)

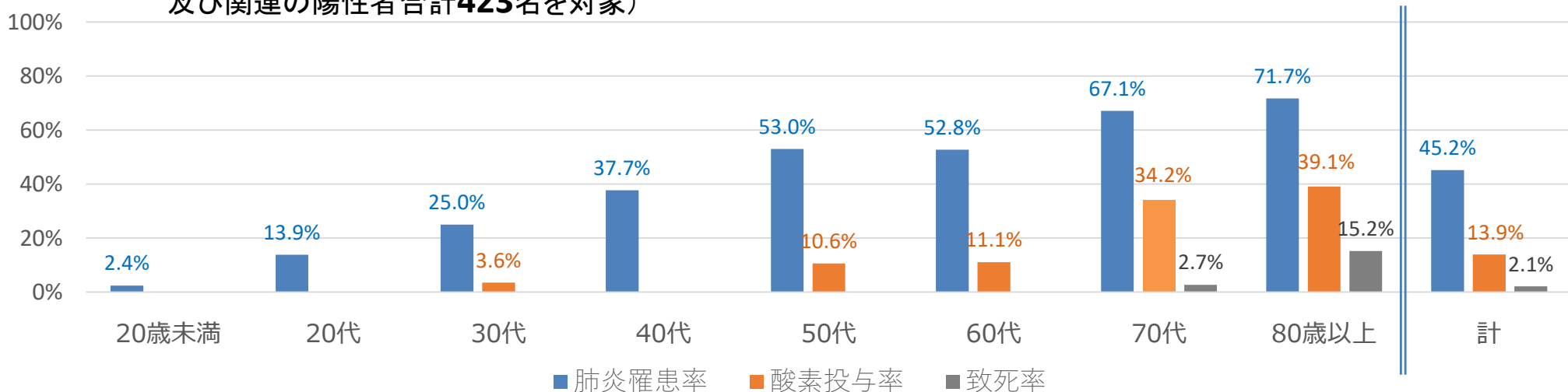


# 変異株と従来株の年代別肺炎併発率等割合の比較

① **変異株** (令和3年3月14日以後に発表し、5月31日までに退院(死亡含む)した陽性者のうち、変異株スクリーニング検査陽性と判定された**658名**を対象)



② **従来株** (令和3年3月14日以後に発表し、5月31日までに退院(死亡含む)した陽性者のうち、従来株と判定された者及び関連の陽性者合計**423名**を対象)

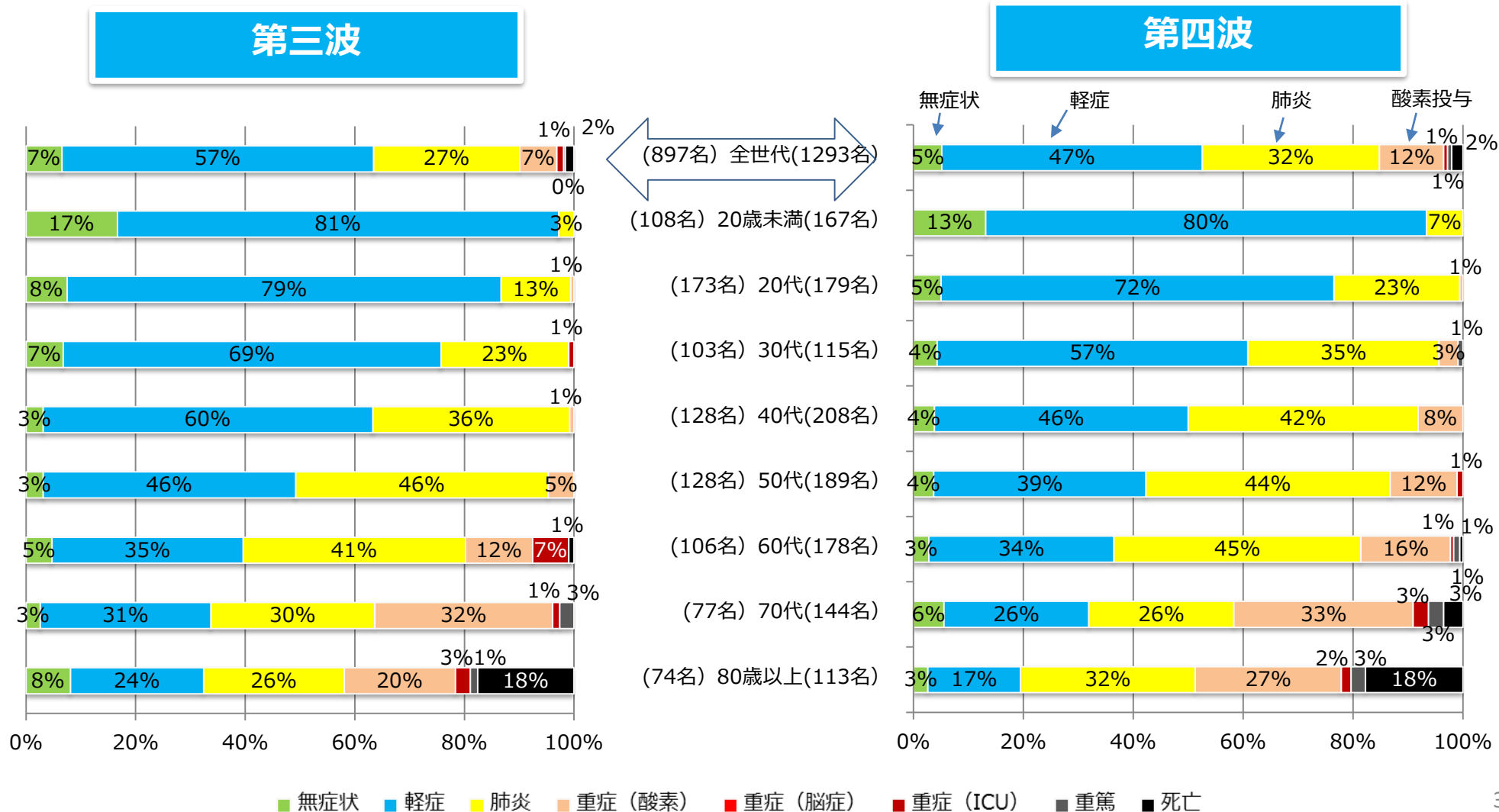


※資料の精査等により、以前の公表から数値が変動している場合があります。<sup>33</sup>

# 感染者の重症度

(三波 897人、四波 (5/31までの退院者) 1,293人)

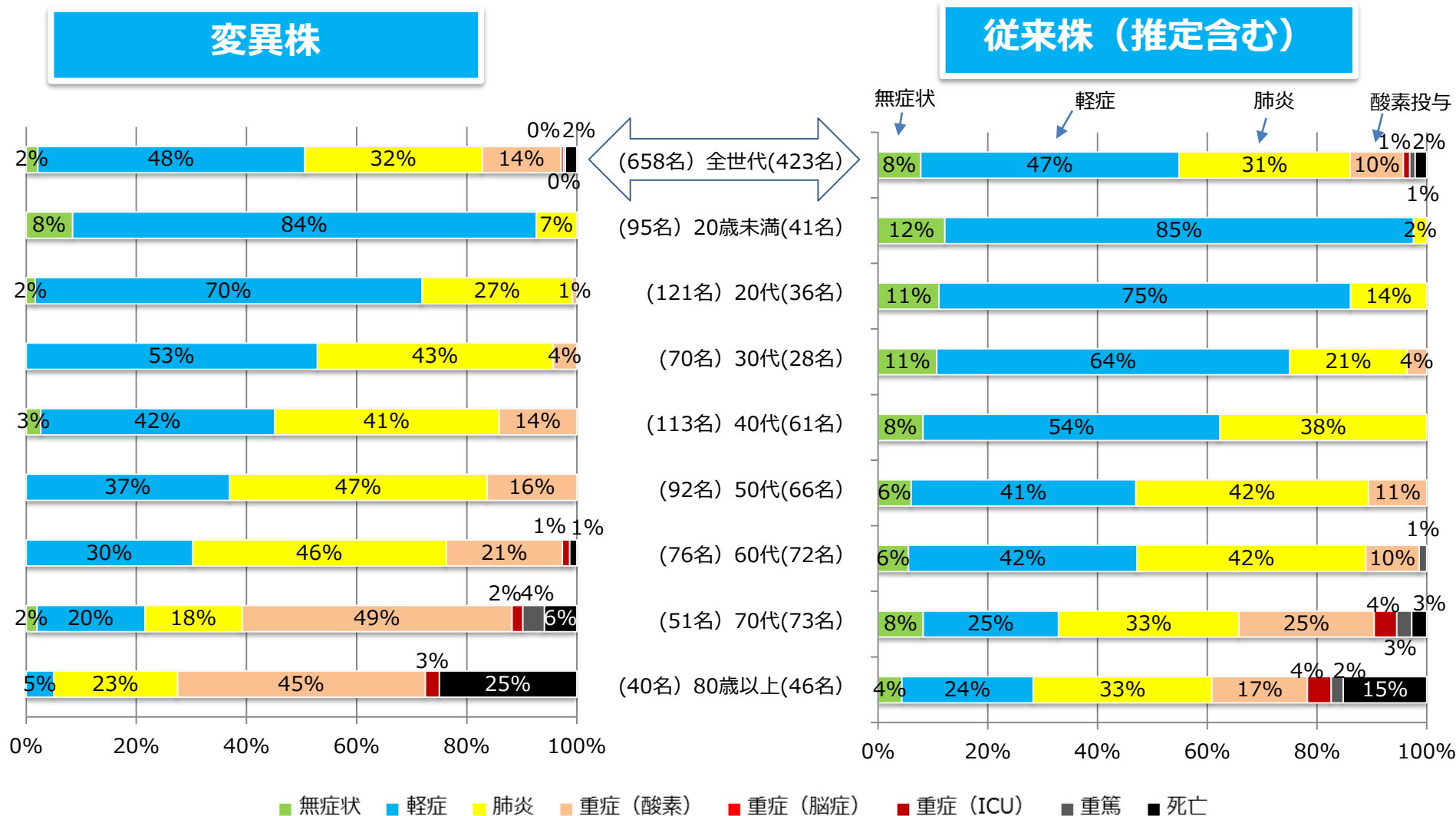
- 第四波では、第三波に比べて全ての年代において肺炎以上の割合が大きい。
- どちらも、高齢になるほど肺炎以上の割合が増えており、特に80歳以上では、酸素投与やICU管理が必要となる重症者や死亡者の割合が4割を超えていることは留意するべきである。



# 型別 感染者の重症度

(令和3年5月31日退院分まで)

- 変異株では、従来株に比べて、全ての年代で肺炎以上の割合が高くなり、酸素投与が必要な者が多い。
- 特に、70代以上では酸素投与以上の割合が高くなっており、注意が必要であるとともに、若い年代でも肺炎で酸素投与が必要な者がいることに留意する。

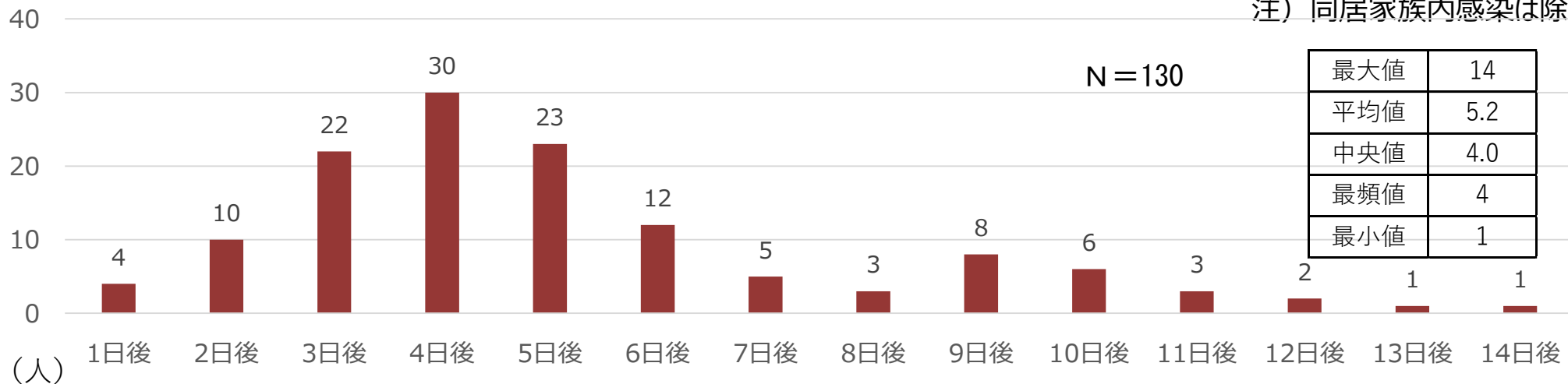


# 型別 新型コロナウイルス感染者の曝露を受けてからの発症日

- 変異株も従来株も曝露を受けてからの発症日は、4日後が最も多く、大きな差はなかった。
- 変異株の方が曝露後7日以内に発症する者が従来株よりやや多かった。

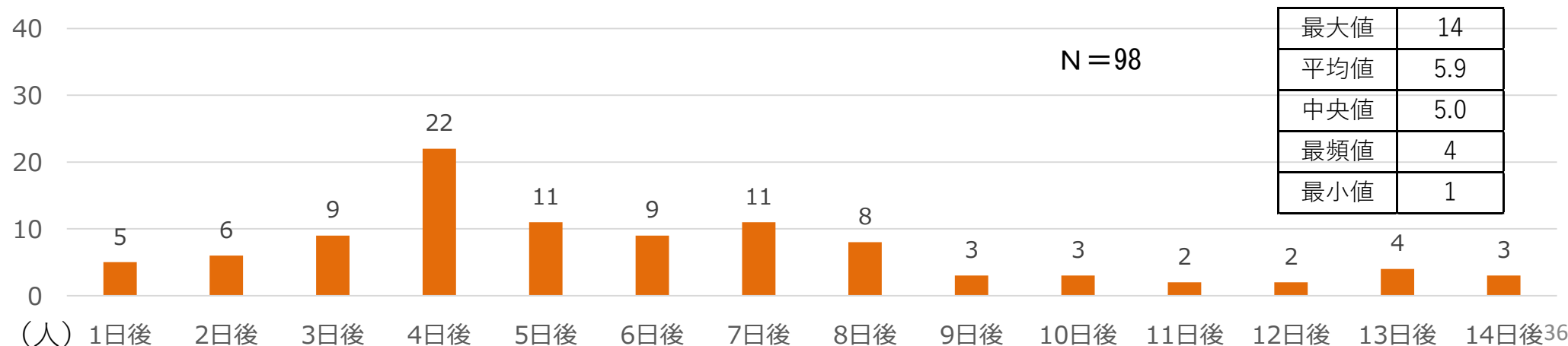
## ①変異株 (第四波陽性者のうち、スクリーニングにより変異株と判定されたまたはその関連者)

注) 同居家族内感染は除く



最大値	14
平均値	5.2
中央値	4.0
最頻値	4
最小値	1

## ②従来株 (第四波陽性者のうち、スクリーニングにより従来株と判定されたまたはその関連者)



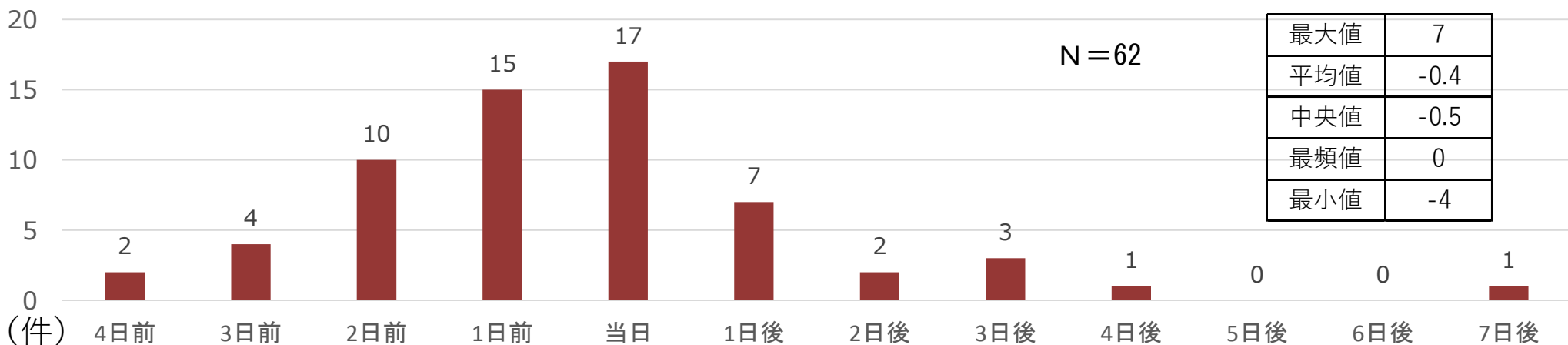
最大値	14
平均値	5.9
中央値	5.0
最頻値	4
最小値	1

# 型別 新型コロナウイルス感染者が他者に感染させたと推定されるタイミング

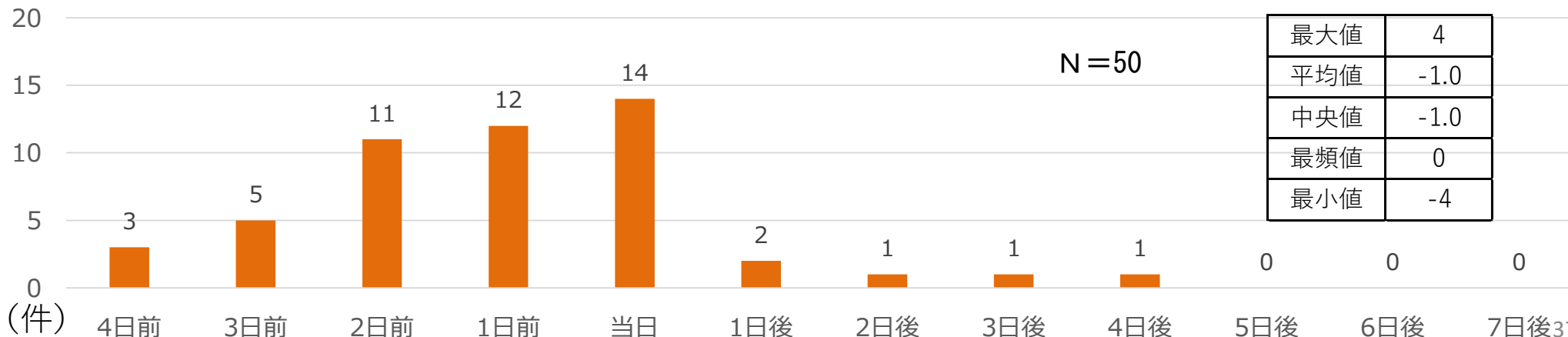
- 変異株と従来株では、他者に感染させたと推定される日に違いはなく、発症当日が最も多く、発症 2 日前までが多かった。
- 発症 3 日前や 4 日前に感染させたと思われる事例があるため、感染者との接触状況を考慮して検査を行う必要がある。

注) 1 人が 1 日に複数名に感染させたと考えられる場合は、1 件としてカウント

## ①変異株 (第四波陽性者のうち、スクリーニングにより変異株と判定されたまたはその関連者)



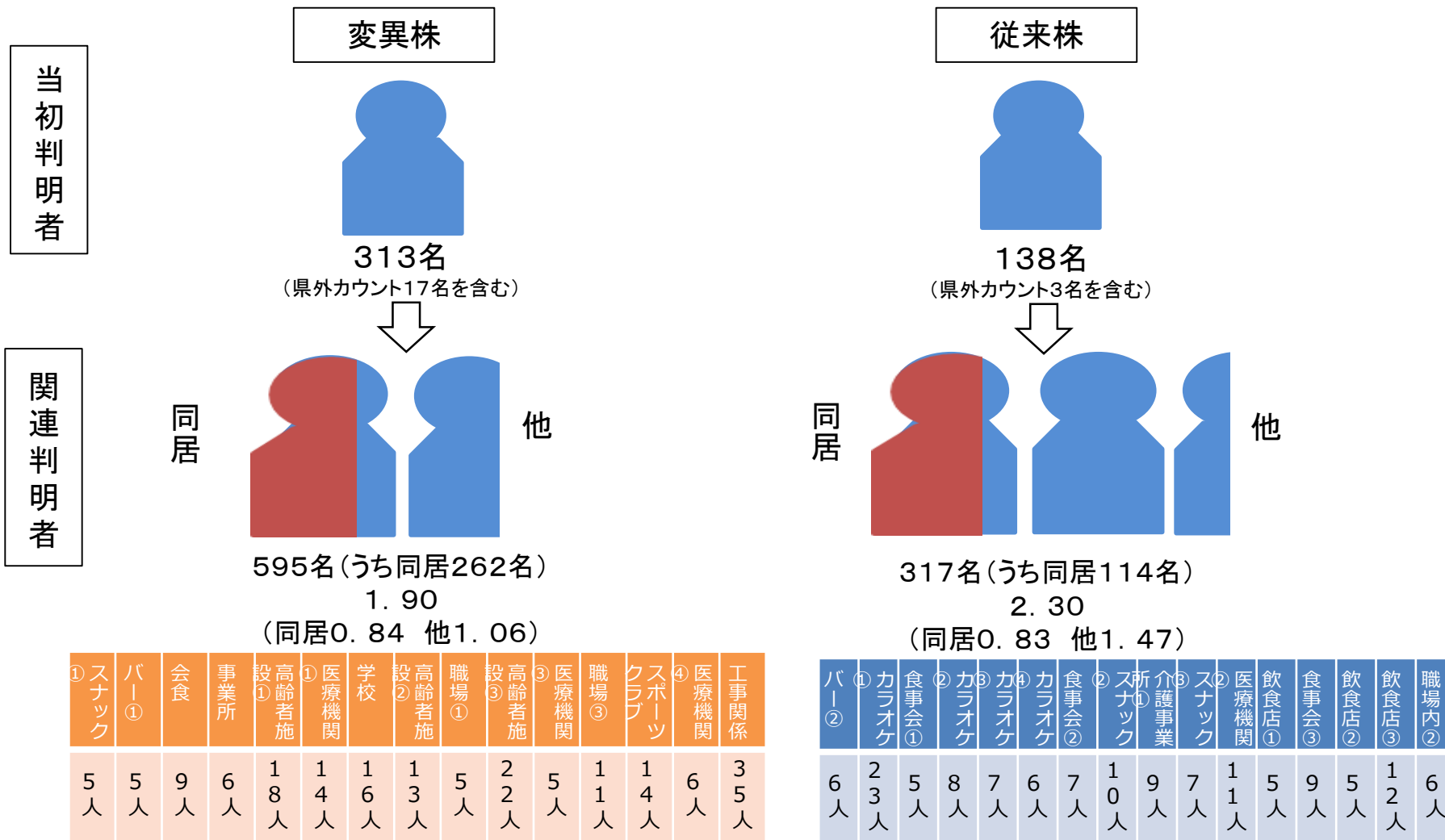
## ②従来株 (第四波陽性者のうち、スクリーニングにより従来株と判定されたまたはその関連者)



# 第4波の濃厚接触者等の感染状況（変異株と従来株の比較）

（令和3年5月31日時点）

- 当初判明者一人から接触者等で何人が陽性とわかったかをみた。同居家族では、わずかに変異株の方が多いが、全体としては従来株の方が多くなった。これは、本県でも変異株に置き換わっているが、従来株のクラスターが多発したことによると考える。 ※5/31時点で変異株、従来株が判明しているものを対象



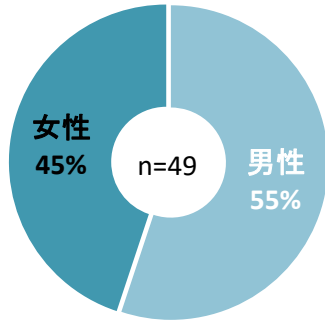
**死亡**



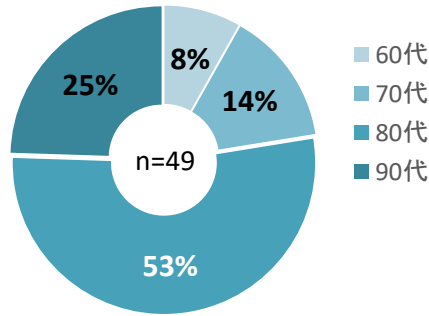
# 死亡された方の状況

令和3年6月30日現在

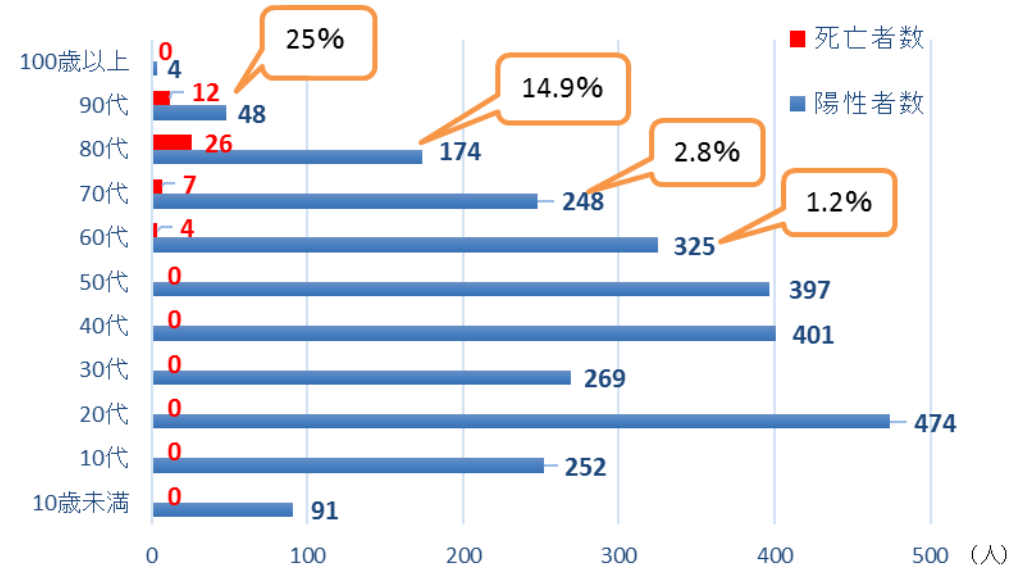
### 男女別死亡割合



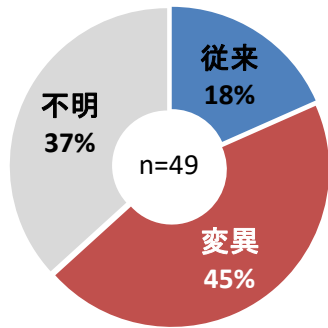
### 年代別死亡割合



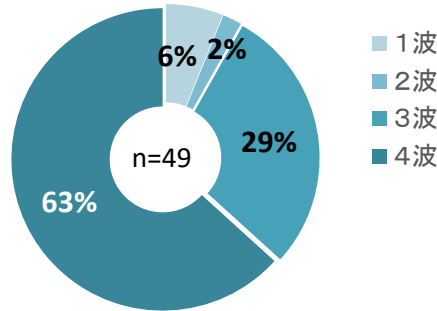
### 年代別にみる陽性者数及び死亡者数



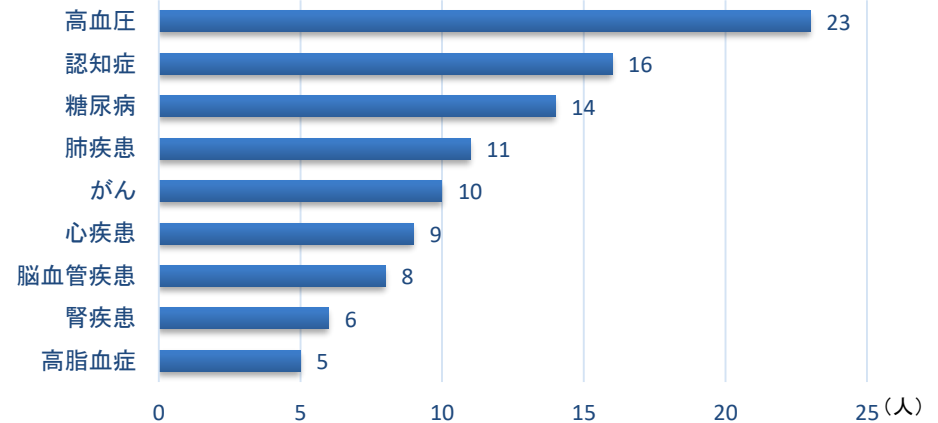
### 変異株の割合



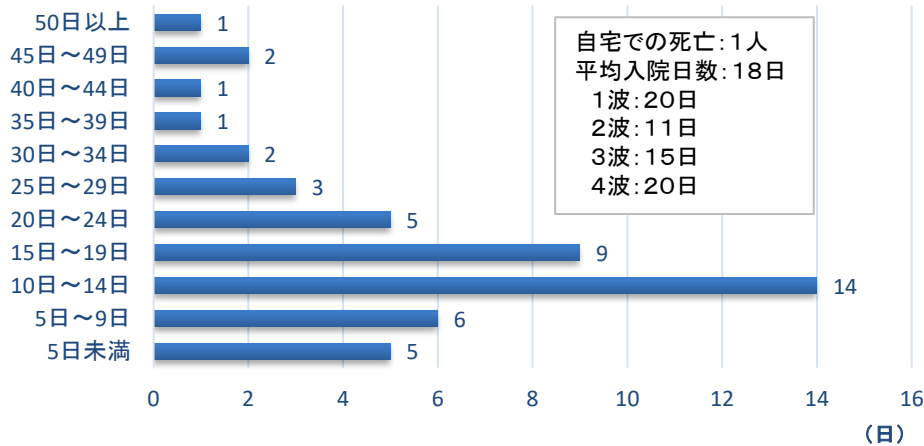
### 1波～4波別死亡割合



### 死亡者の主な基礎疾患



### 死亡者の入院日数

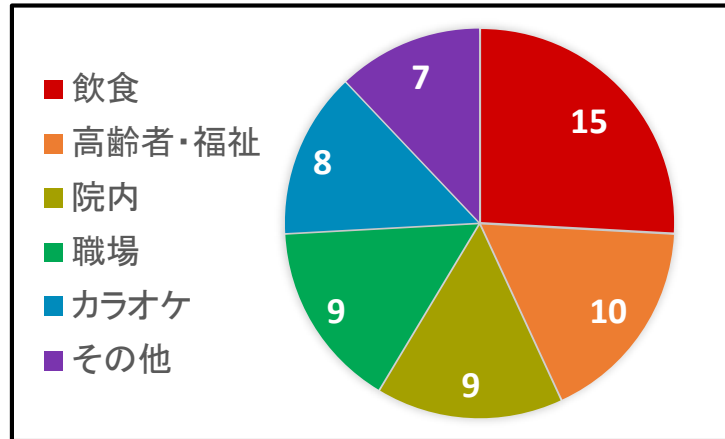


# クラスター

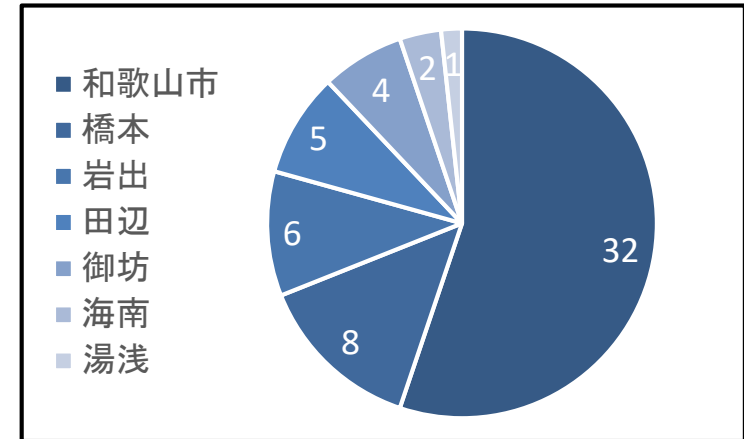
# クラスター発生数 概要

- 発生したクラスターの種別は、飲食関係が最も多く、次いで、高齢者福祉関係、病院であった。
- 保健所別にみると、和歌山市が最も多く半数以上で、次いで、橋本、岩出、田辺の順であった。
- 第四波が31件と最も多く、次いで第三波20件、第二波4件、第一波3件であった。

## 1. 種類別発生数

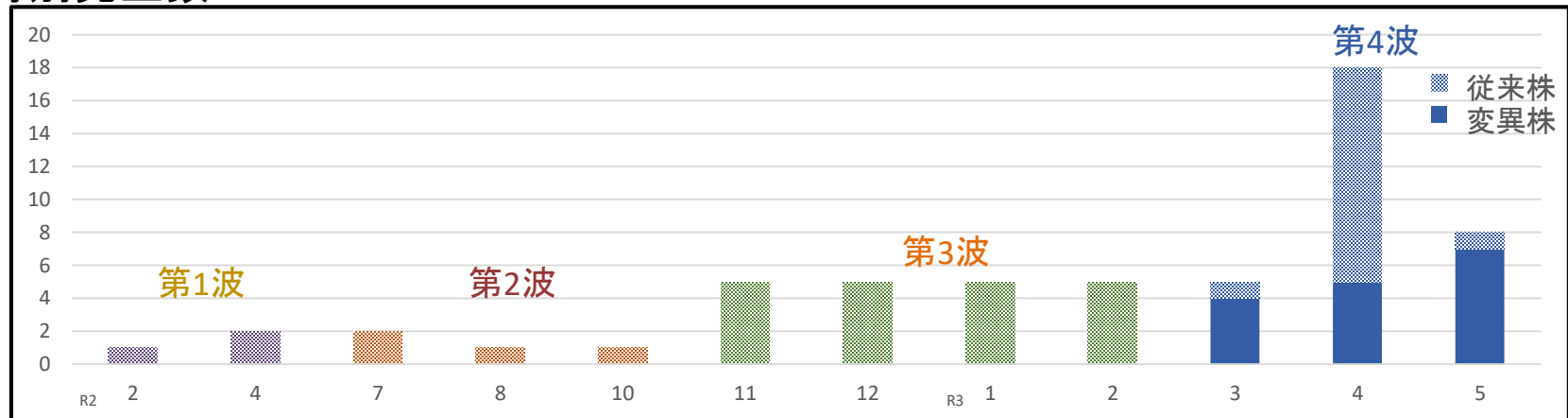


## 2. 保健所別発生数



## 3. 月別発生数

※横列: 月、縦列: 発生件数

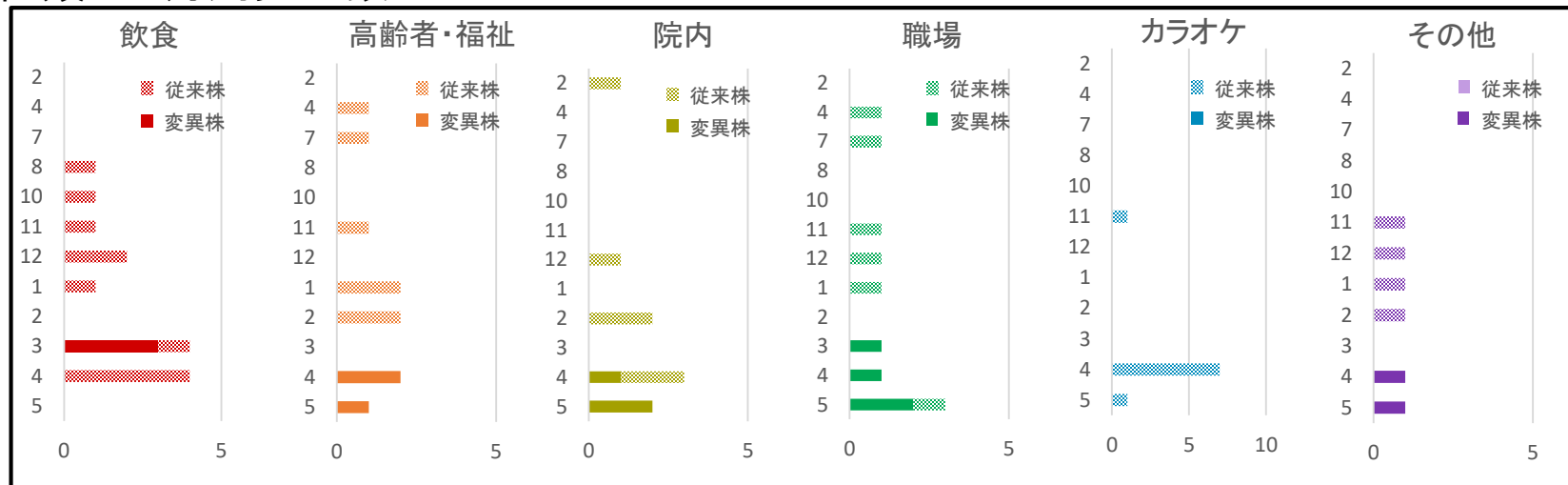


# クラスター発生数 概要

- 感染が拡大した時期には、飲食、高齢福祉、病院、職場でクラスターが多く発生している。
- 本県では、4月にカラオケによるクラスターが多発したが、これは従来株によるものであった。
- 変異株の方が従来株よりクラスターの発生規模がやや大きくなる傾向があった。

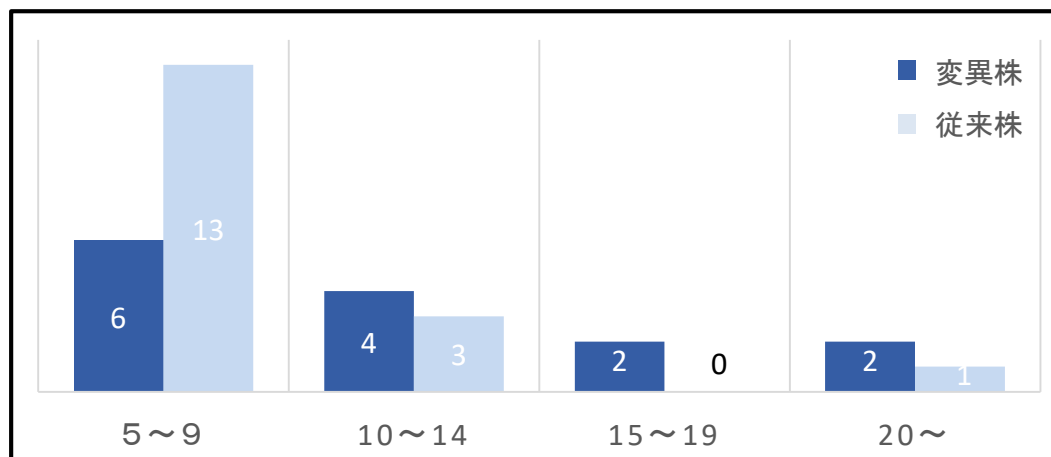
## 4. 種類ごと月別発生数

※横列:発生件数、縦列:月



## 5. 第4波における規模別発生数

※横列:クラスター人数、縦列:件数



変異株検査は  
第4波から実施



# 新型コロナウイルスのゲノム解析 (県分)

令和2年8月27日現在

国立感染症研究所  
病原体ゲノム解析研究センター提供

※図中の濃い横線が県内感染者の  
遺伝子解析結果を示す

## 本県の第一波の主流 首都圏クラスターからの伝播

- 北海道
- 東北
- 関東
- 北陸・信州
- 中部
- 関西
- 中国・四国
- 九州

ダイニング  
バー関係

デイベ  
ス関係

公立学校  
関係

## 本県の第二波の主流

※新宿クラスターから伝播

食堂関係

旅行客  
関係

友人飲食・  
宿泊関係

訪問介護・  
入浴関係

## 本県の第一波の始まり

ヨーロッパ旅行者  
関係

武漢

済生会  
有田病  
院関係

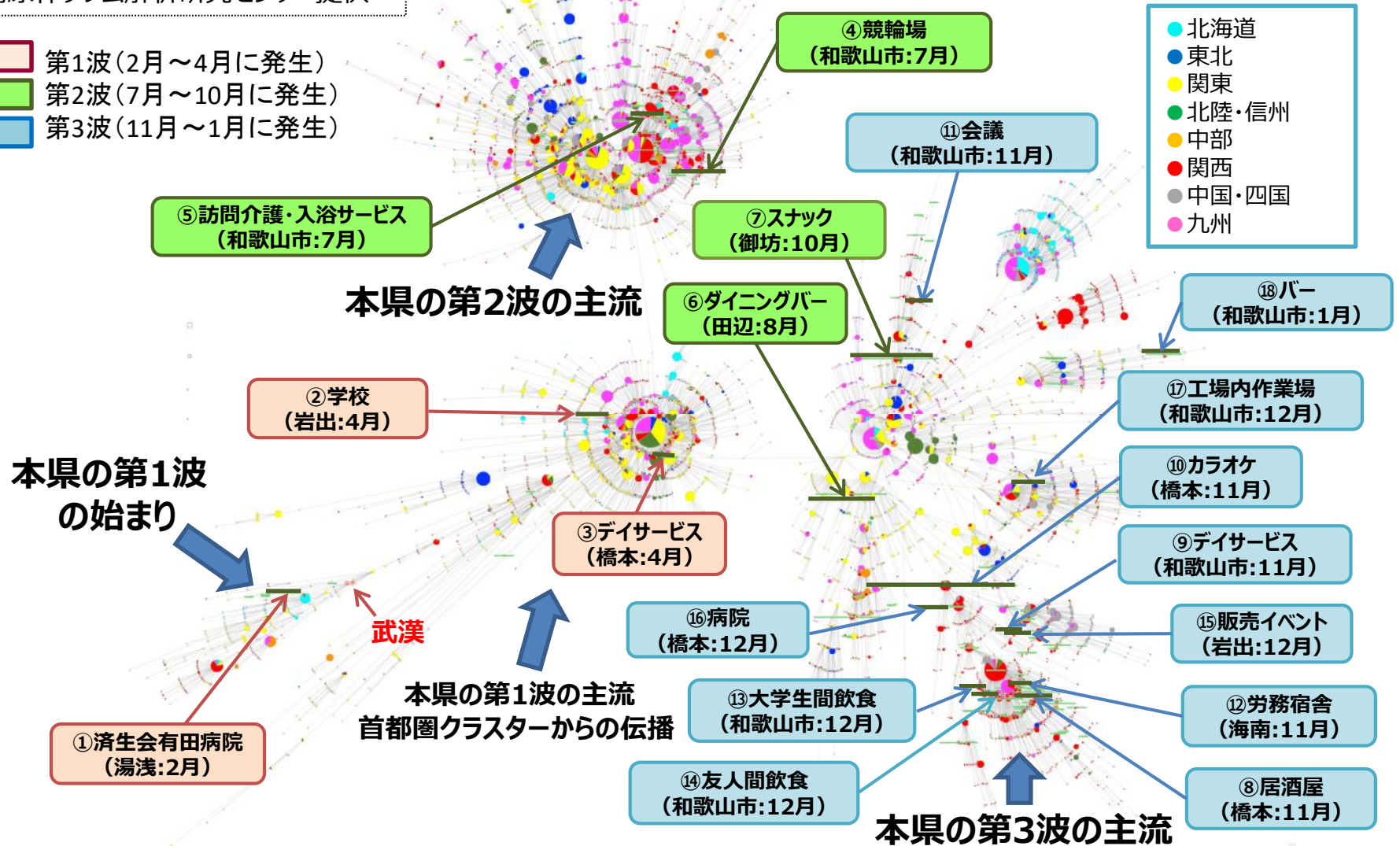
和歌山 ← 大阪 ← 7月東京 ← 4月首都圏 ← 3月ヨーロッパ ← 2月武漢

# 新型コロナウイルスのゲノム解析（主なクラスター） 令和3年1月現在

国立感染症研究所  
病原体ゲノム解析研究センター提供

- 第1波（2月～4月に発生）
- 第2波（7月～10月に発生）
- 第3波（11月～1月に発生）

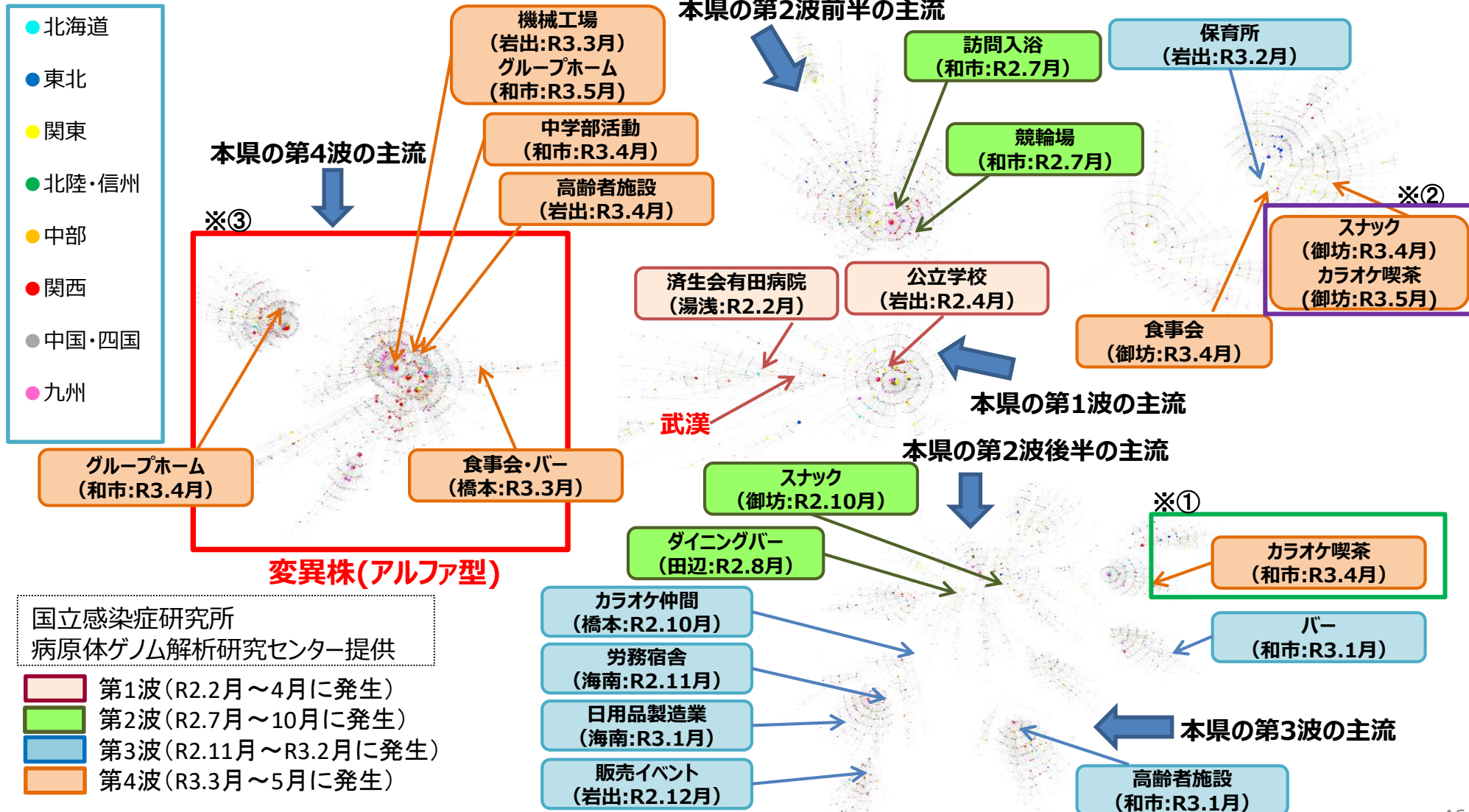
※図中の濃い緑線は本県集団感染者の遺伝子解析結果を、薄い緑線は本県感染者の遺伝子解析結果を示す。



# 新型コロナウイルスのゲノム解析（主なクラスター）

令和3年6月11日現在

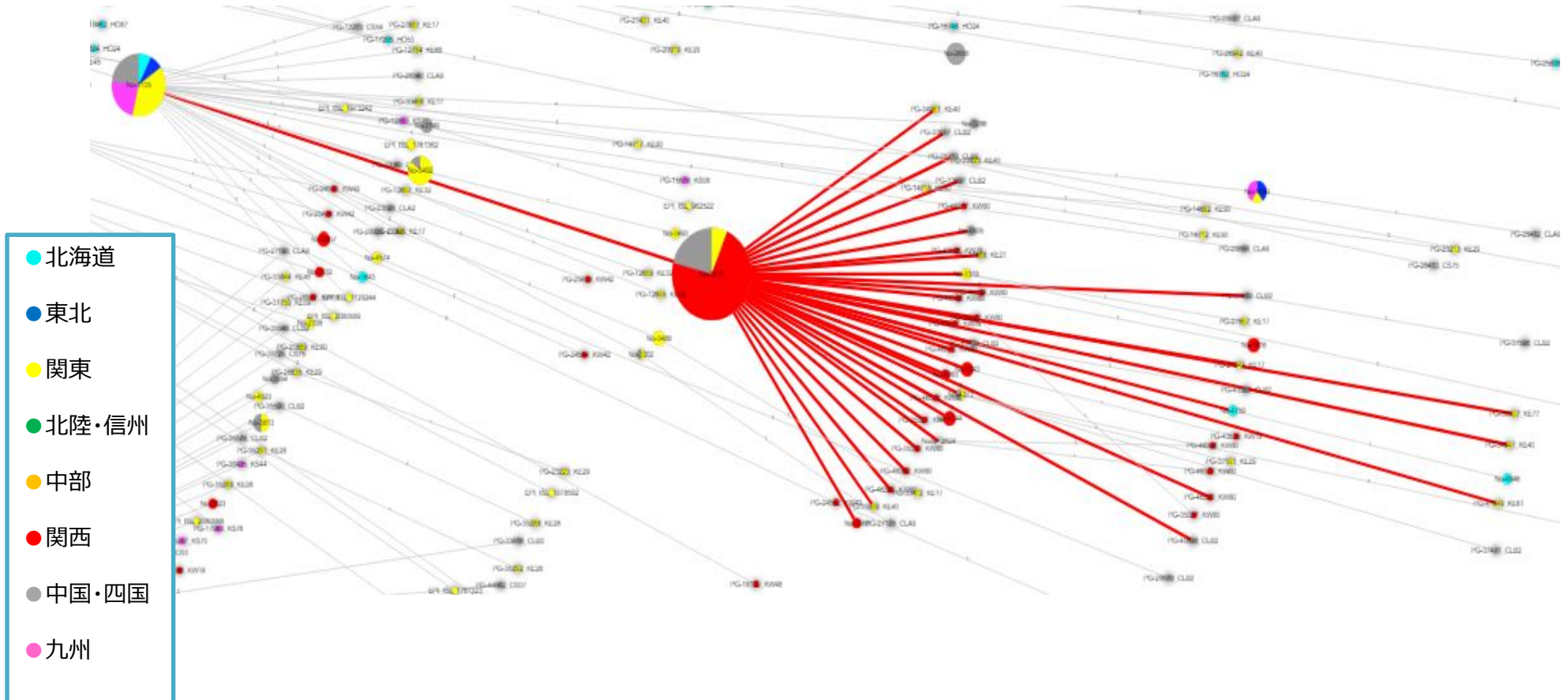
○ 新型コロナウイルスは変異しやすく、昨年2月に本県でも見られた武漢株は消滅した。4月の首都圏を中心に多発したクラスターも変異しながら全国に散らばり、クラスターとなっている。第四波のアルファ変異株は、関西を中心に非常に多くのクラスターを形成し、本県でも多くのクラスターが発生した。



# 新型コロナウイルスのゲノム解析 – 従来株の伝播事例

- 新型コロナウイルスのゲノム解析から見ると、本県で多くの感染者が出たカラオケ関係のクラスターは、関東地域から感染が持ち込まれ、県内で感染が拡大したことが推定される。したがって、特に、感染が拡大している状況下では、クラスターを早期に探知し、感染源を探求の上、特定してPCR検査を行い、さらなる感染拡大防止を図ることが極めて重要である。 ※赤い線をつないだのは本県の感染者

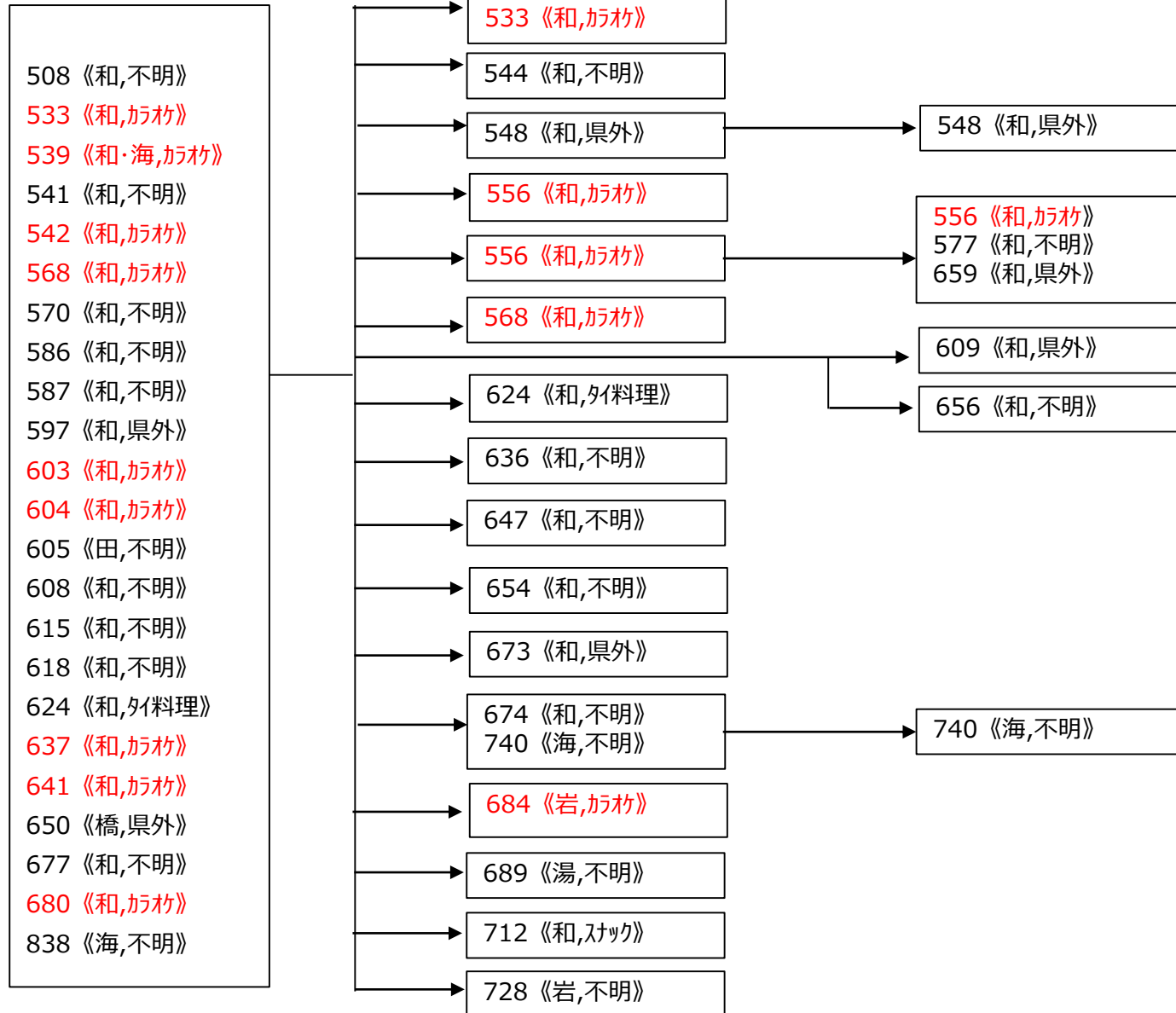
## ※①エリア





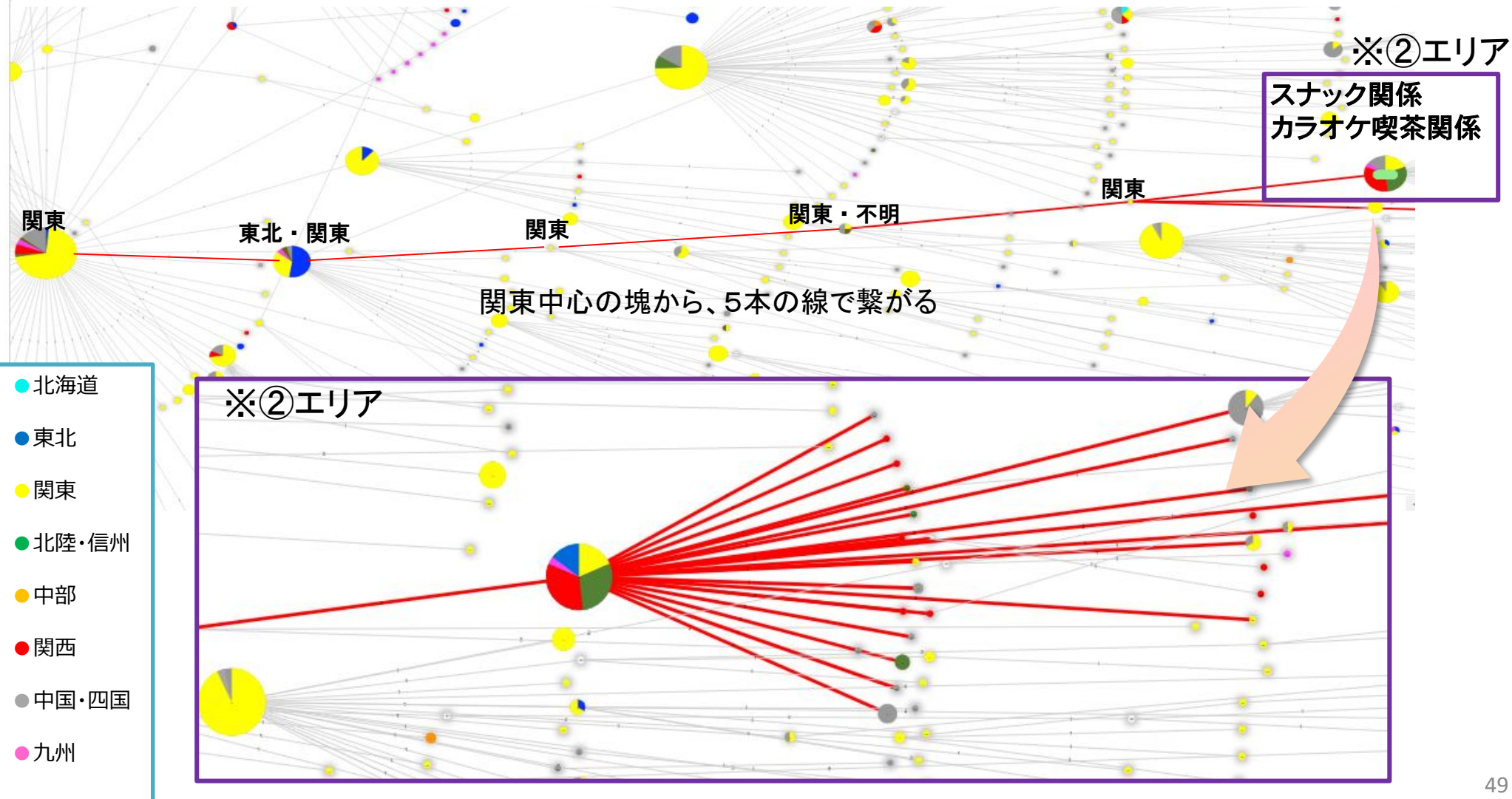
# 新型コロナウイルスのゲノム解析 – 従来株の伝播事例

○ 本県で多くの感染者が出たカラオケ関係のクラスターを赤字で、その他を黒字で表した。3月末から5月初旬に、感染源が不明の者も同じウイルスまたは同一系統の感染であったことから市中で感染が拡大したと思われる。



# 新型コロナウイルスのゲノム解析 – 従来株の伝播事例

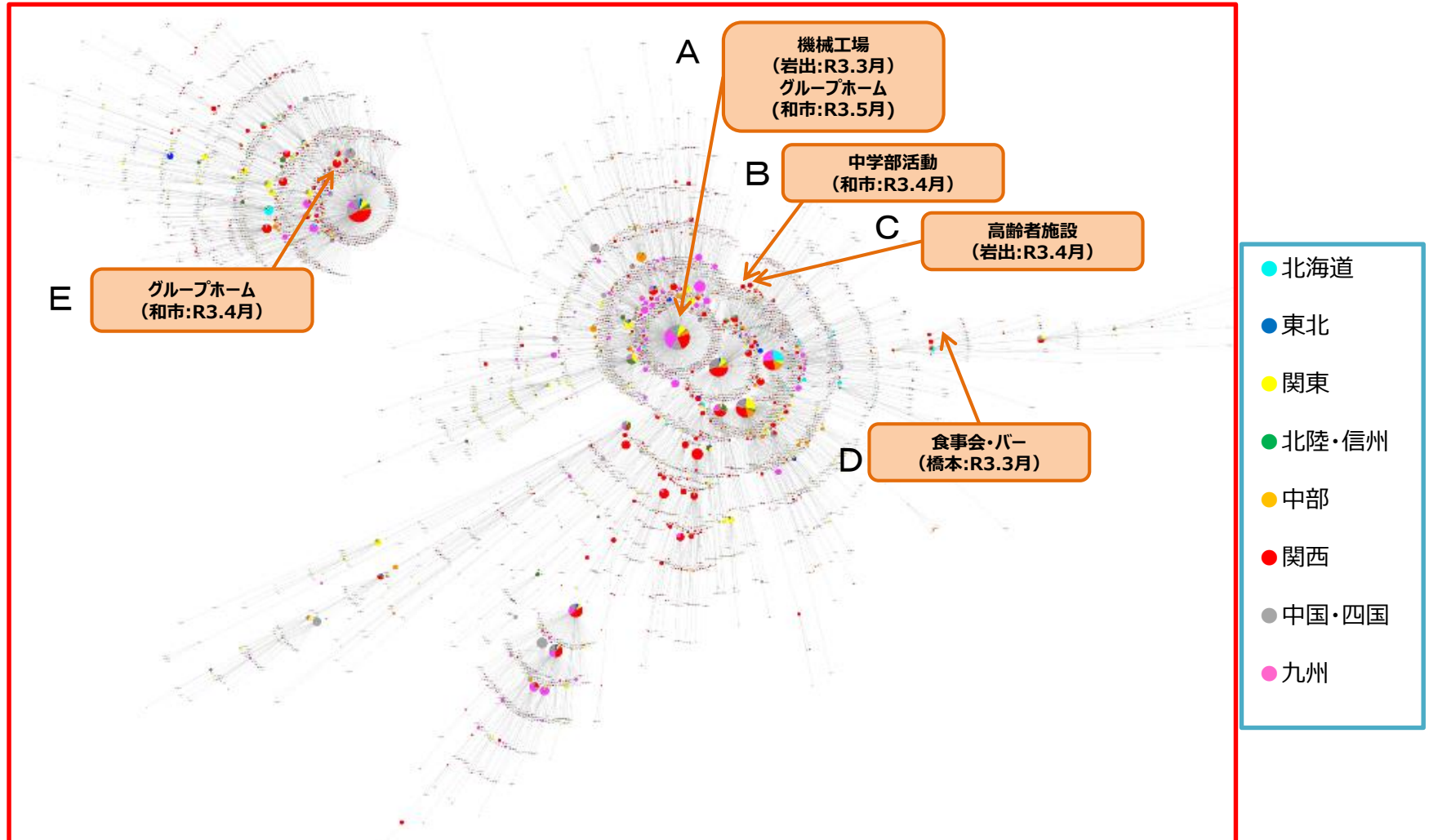
- 第四波の飲食関係のクラスター（従来株）は、関東地域から5つ集団等を経て感染伝播したことがわかった。
- この二つのクラスターは同じ地域で約2週間の間隔で発生した。※②の太い赤い線をつないだのは本県の感染者
- 関東地域でクラスターとなった後、2月初旬→4月下旬から5月上旬に本県に感染が伝播されたものということがわかる。したがって、人の流れが止められない中で、感染者の早期発見が重要である。



# 新型コロナウイルスのゲノム解析（第四波の変異株クラスター）

- 第四波のアルファ変異株は、関西を中心に非常に多くのクラスターを形成し、本県でも多くのクラスターが発生した。変異株も人から人に伝播する中でわずかながら変異し続けている。

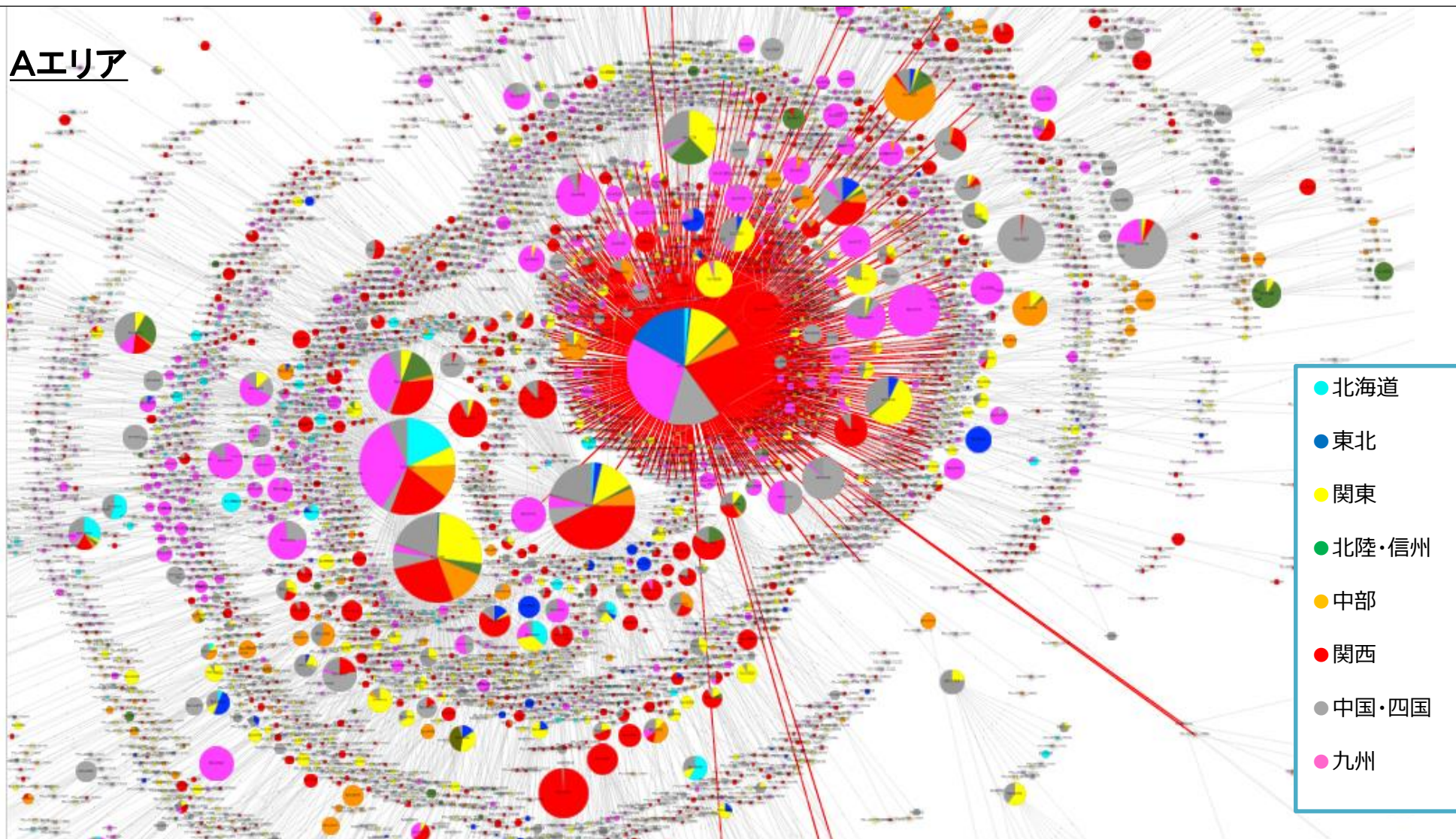
## ※③変異株(アルファ型)



# 新型コロナウイルスのゲノム解析（第四波のアルファ変異株クラスター）

- 第四波のアルファ変異株は、関西を中心に非常に多くのクラスターを形成した。赤い線でこのエリアの感染者をつなぐとその広がり的大小がうかがえる。本県の感染者もこのエリアの中心に存在し、さらに別の感染者に急速に感染拡大した。変異株は従来株より感染拡大のスピードが速いことが考えられることから、感染者の早期発見と隔離が重要である。

## Aエリア



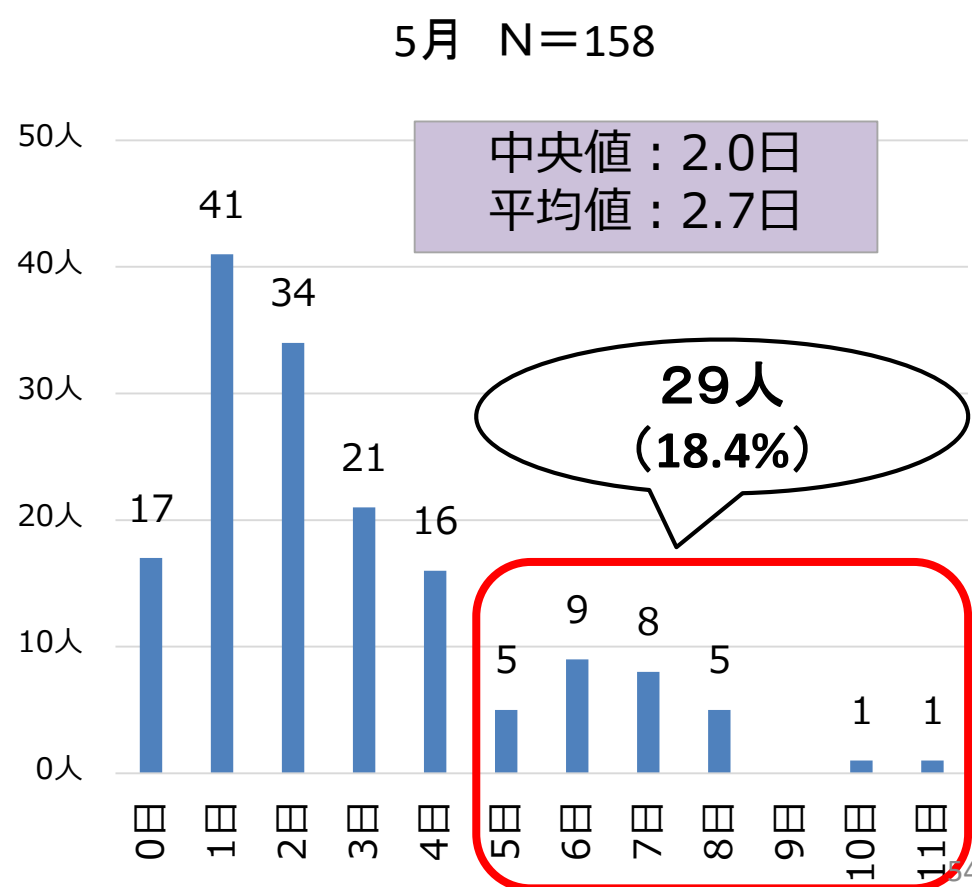
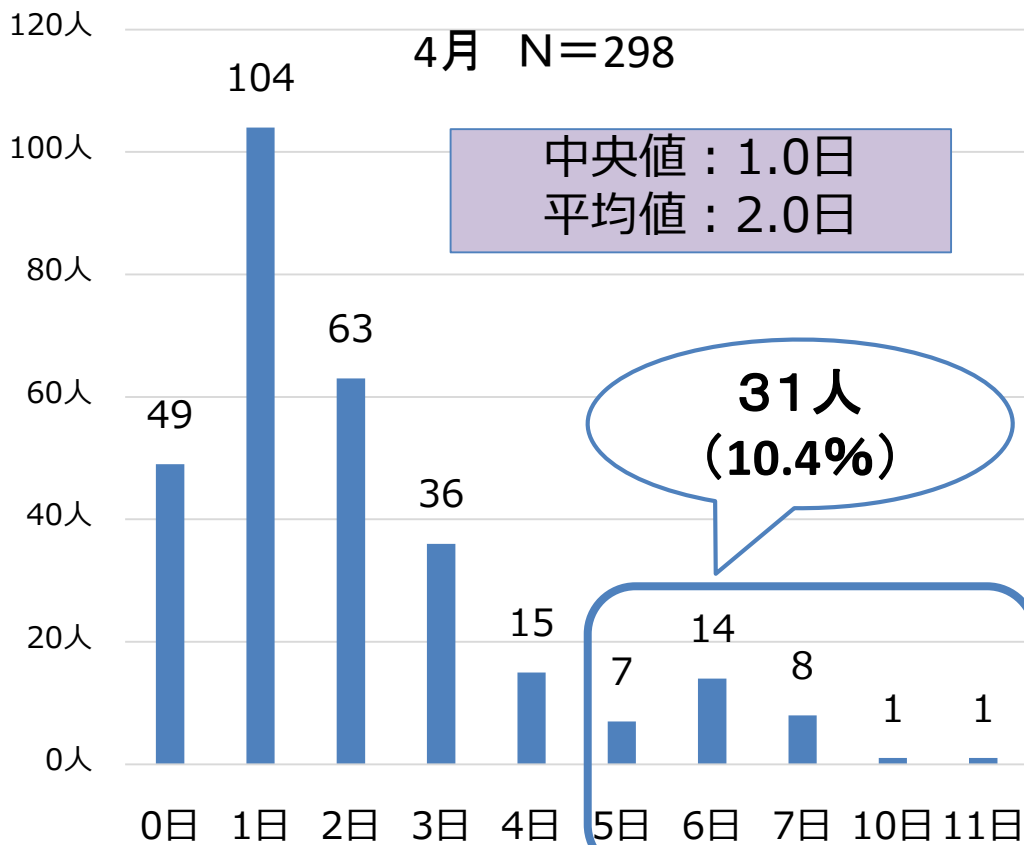


# 受診・診断

# 令和3年4月、5月中の新規感染者の発症から受診までの日数 (当初判明者分)

無症状者、県外カウント除く

- 発症から医療機関受診までの日数を見ると、発症後1日が最も多く、最大11日であった。
- 発症後5日以降の受診者は、4月では31人(10.4%)であったが、5月では29人(18.4%)となった。感染者の治療および感染拡大防止の観点からも早期受診が望まれる。
- 受診が遅い人の特徴としては、高齢者、独居・二世帯が多かった。また、受診が遅い人は入院後、肺炎があり、酸素投与が必要になっている人が多い(次ページ参照)。



# 令和3年4月中の新規感染者のうち発症から受診まで 5日以上かかった方の属性と症状（当初判明者分）

## ① 性別

男性	女性
16人	15人

## ② 職業

無職	パート	会社員	自営業	医療職	学生
10人	7人	6人	4人	2人	2人

## ③ 年代

	幼児	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	90代	合計
受診まで5日以上	0人	1人	4人	3人	6人	3人	5人	7人	2人	0人	31人
割合		3%	13%	10%	19%	10%	16%	23%	6%		100%
全体	1人	11人	59人	33人	49人	39人	44人	35人	24人	3人	298人
全体に占める割合	0%	4%	20%	11%	16%	13%	15%	12%	8%	1%	100%

## ④ 同居人数

	0人	1人	2人	3人	4人	5人	6人以上	不明	合計
受診まで5日以上	11人	14人	1人	3人	-	2人	-	-	31人
割合	33%	45%	3%	10%		6%			100%
全体	77人	83人	55人	49人	17人	11人	4人	2人	298人
全体に占める割合	26%	28%	18%	16%	6%	4%	1%	1%	100%

## ⑤ 入院後の症状

**約7割の方が重症に！**

肺炎像、酸素投与あり(うち1名はICU)

21人 (20~30代:3名、40~50代:6名、60代以上:12名)

軽症

5人

治癒

5人



# 令和3年5月中の新規感染者のうち発症から受診まで5日以上かかった方の属性と症状（当初判明者分）

## ① 性別

男性	女性
15人	14人

## ② 職業

無職	パート	会社員	自営業
14人	3人	8人	4人

## ③ 年代

	幼児	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	90代	合計
受診まで5日以上	0人	0人	2人	1人	5人	5人	6人	5人	5人	0人	29人
			7%	3%	17%	17%	21%	17%	17%	0%	100%
全体	0人	6人	34人	13人	25人	30人	26人	15人	9人	0人	158人
全体に占める割合	0%	4%	22%	8%	16%	19%	16%	9%	6%	0%	100%

## ④ 同居人数

	0人	1人	2人	3人	4人	5人	不明	合計
受診まで5日以上	9人	10人	9人	1人	-	-	-	29人
全体	36人	45人	38人	27人	9人	3人	1人	160人
全体に占める割合	23%	28%	24%	17%	5%	2%	1%	100%

## ⑤ 入院後の症状

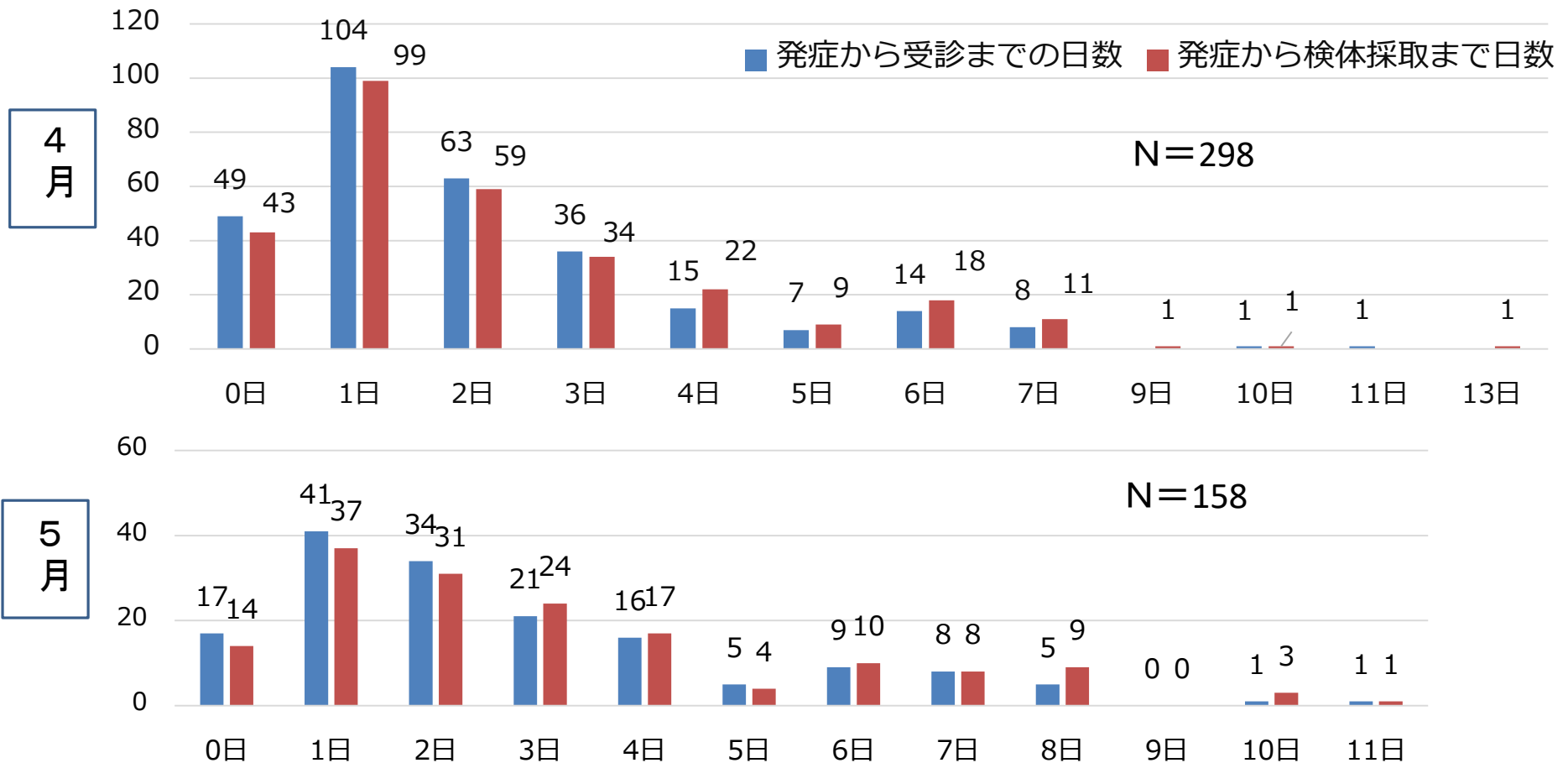
肺炎像、酸素投与あり（うち4名ICU、2名死亡）	軽症
<b>20人</b> （20～30代:1名、40～50代:6名、60代以上:13名）	9人

約7割の方が重症に！

# 令和3年4月、5月中の新規感染者の発症から受診、検体採取までの日数

(当初判明者分)

- 受診と検体採取の日数は発症から1日後が最も多い。
- 発症から受診までの日数が数日後までは、受診した人が検体採取される人より多く、せっかく受診したのに検体採取に至っていない例があった。日を経つと検体採取される人の方が多くなっている。早期受診した人に対する早期検査が必要である。4月中の方が5月より早く受診し、検査につながっている人が多い。5月の連休や感染者数が減少したことも影響していると考える。

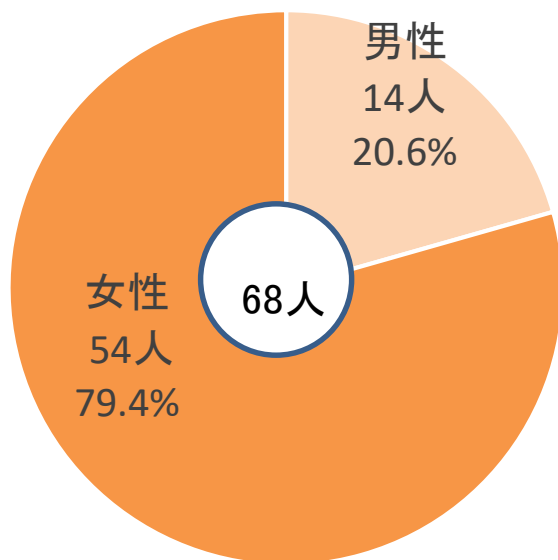


# 新型コロナウイルスワクチン副反応

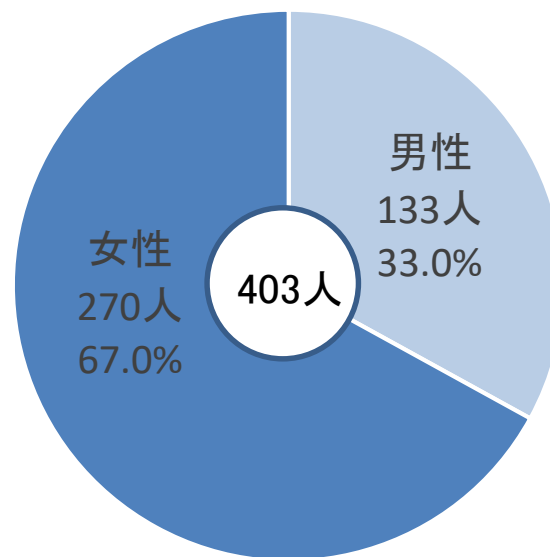
# ① ワクチン2回目接種後の副反応の出現率

- 県内病院で471人の新型コロナワクチン（ファイザー）を2回接種後の副反応の出現状況をみた。
- ここでいう副反応とは、37.5度以上の発熱があった者でかつその他の全身症状が見られた場合をいう。副反応があった者は全体の14.4%で、女性が男性より有意に多かった。

副反応あり



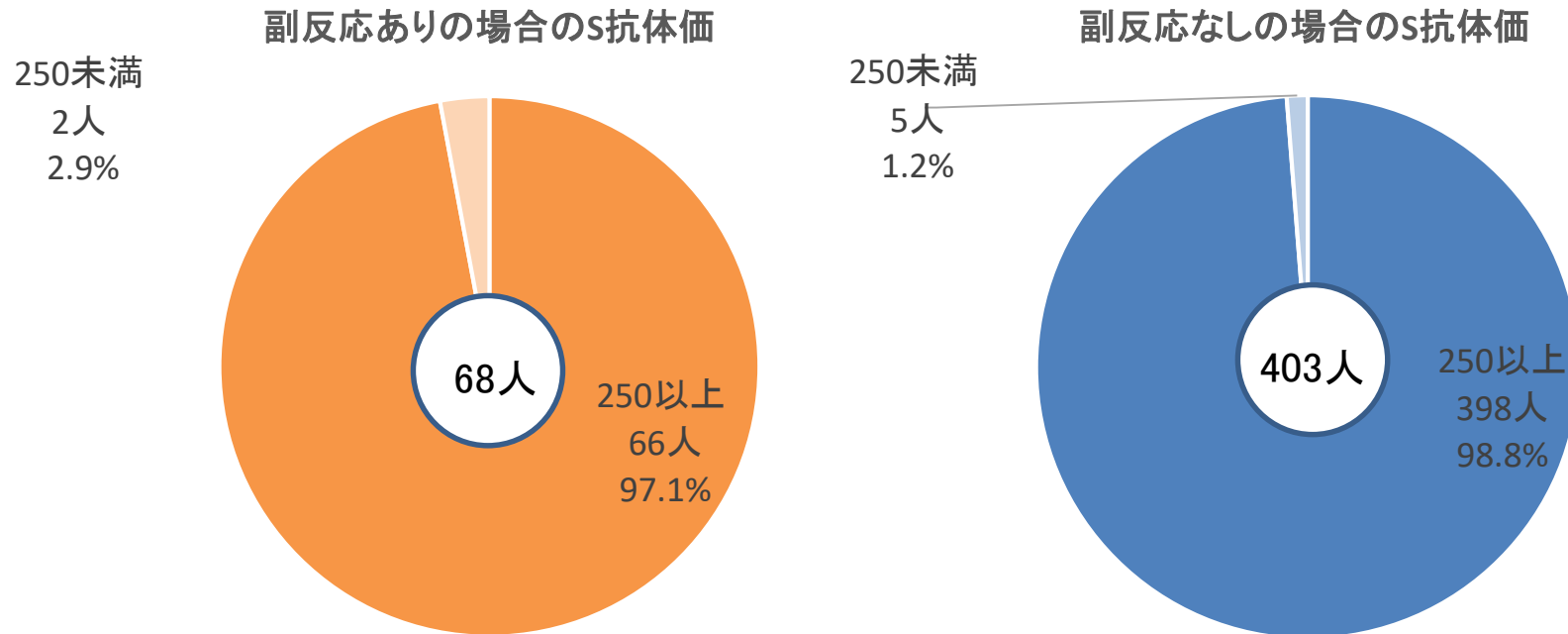
副反応なし



	副反応あり	副反応なし	計
男性	14人(9.5%)	133人(90.5%)	147人(100%)
女性	54人(16.7%)	270人(83.3%)	324人(100%)

## ② ワクチン2回目接種後の副反応と抗体価の関係

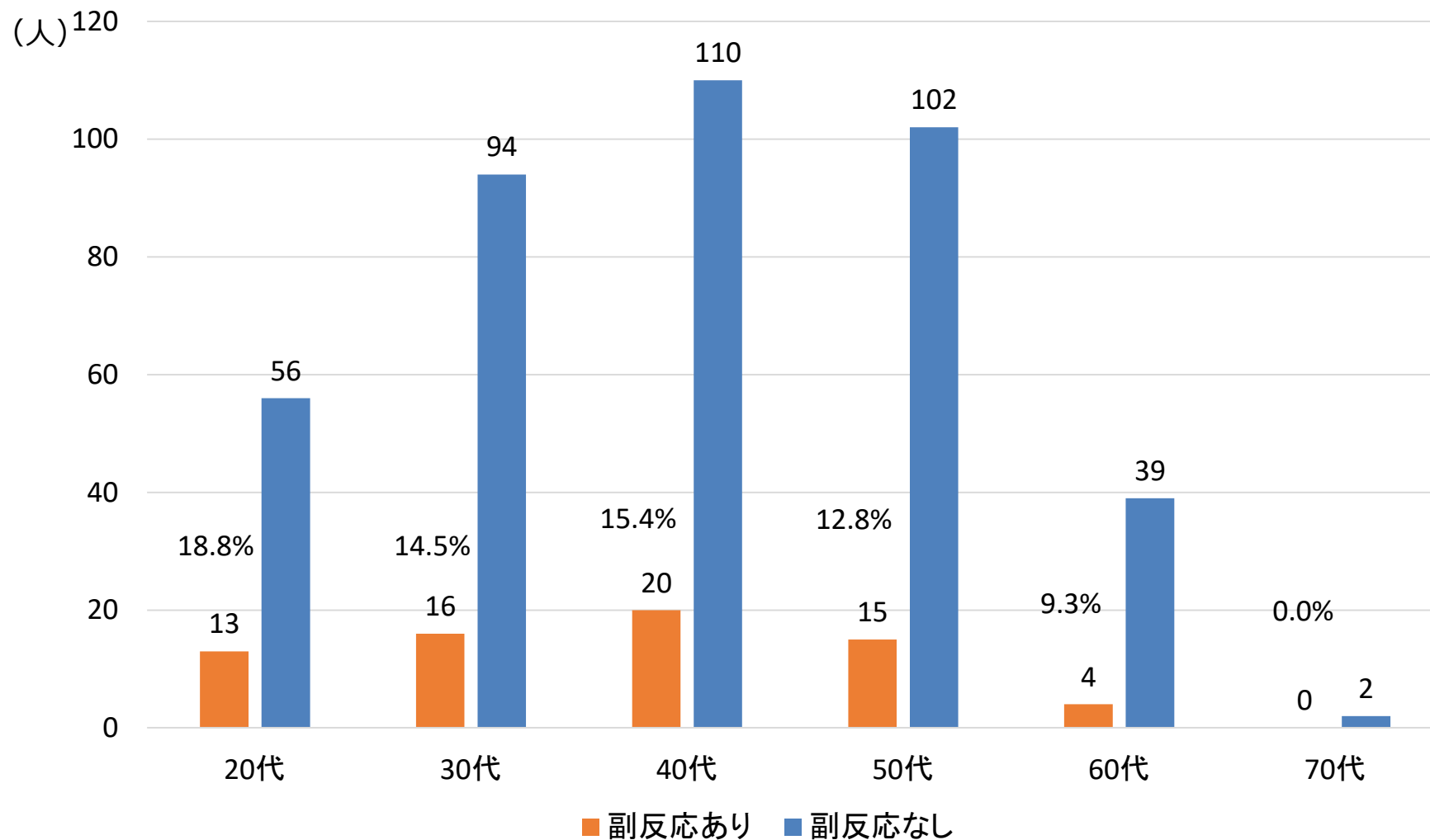
- 副反応の有無とS抗体値との関係では、関連性は見られなかった。つまり、37.5度以上の発熱があった者でかつその他の全身症状が見られた場合と明らかな副反応がない場合でも、ワクチン接種によって産生されるS抗体値に差は見られず、副反応が無くてもS抗体値は、ほとんどが高力価となっている。



	CoV19S抗体値 250u/ml以上	CoV19S抗体値 250u/ml未満	計
副反応あり	66人(97.1%)	2人(2.9%)	68人(100%)
副反応なし	398人(98.8%)	5人(1.2%)	403人(100%)

### ③ ワクチン2回目接種後の年代別副反応出現状況

- 病院の医療従事者が対象のため、若い年代が中心となっている。
- このため、新型コロナワクチン接種後の副反応の出現率について、特に20代～50代では年代による有意な差は見られなかった。



## ④ 副反応の症状

(1) ワクチン2回接種後の副反応(37.5度以上の発熱者でその他の症状があった者)

発熱	全身倦怠感	頭痛	全身関節痛	筋肉痛	嘔気・嘔吐	腰痛	不整脈	脱力感	口唇ヘルペス
68	37	20	19	8	5	1	1	1	1

※重複あり

(2) 2回目接種しなかった事例

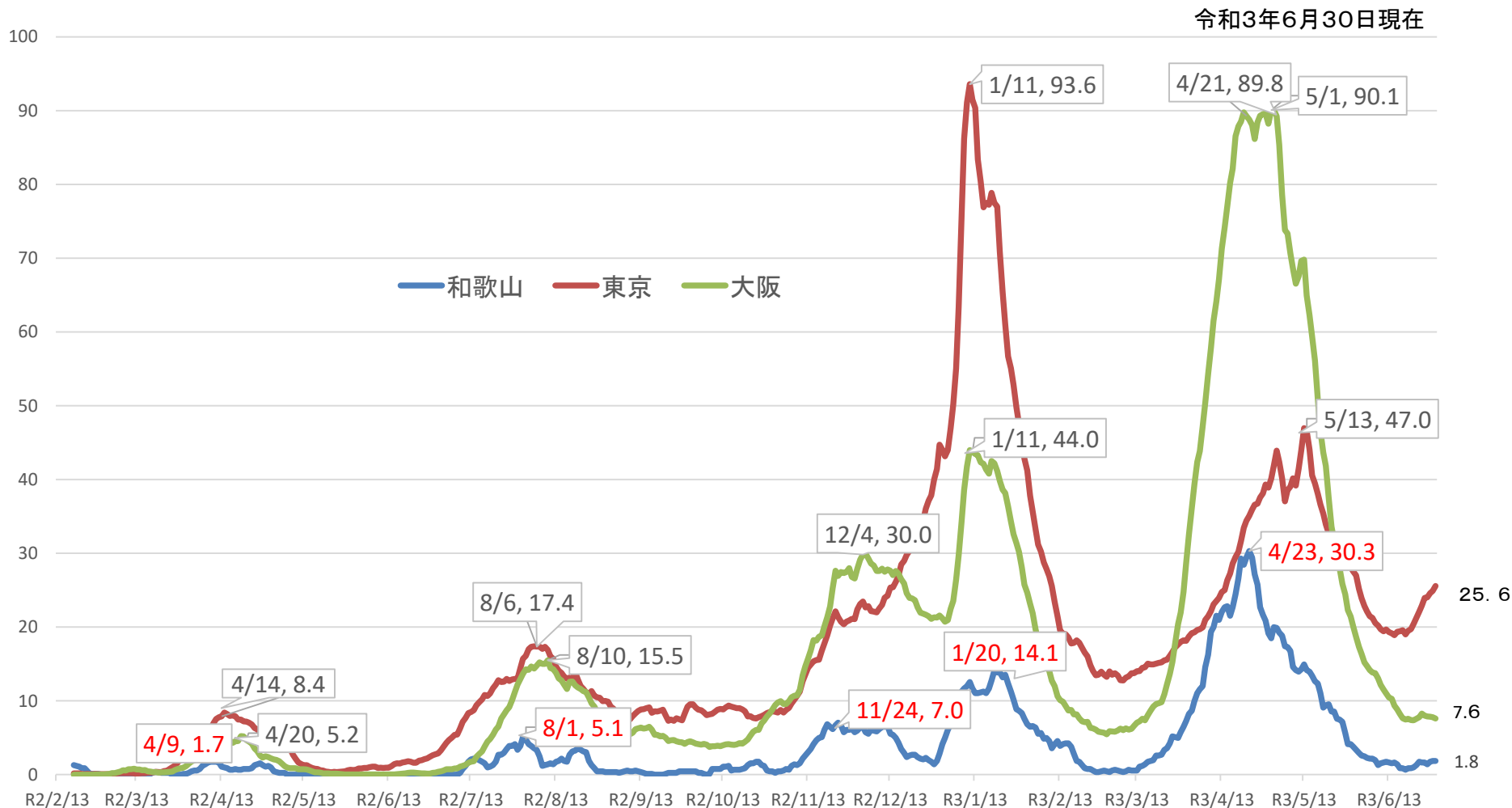
	2回目接種しなかった理由
事例1女性	<u>強度の全身倦怠感</u> あり、恐怖感を感じ、2回目接種せず
事例2女性	接種40分後患側、 <u>脱力感・握力低下</u> あり、2回目接種せず
事例3女性	接種後、 <u>喉の違和感と息苦しさ</u> あり(約2~3時間)、2回目接種せず

**今後**



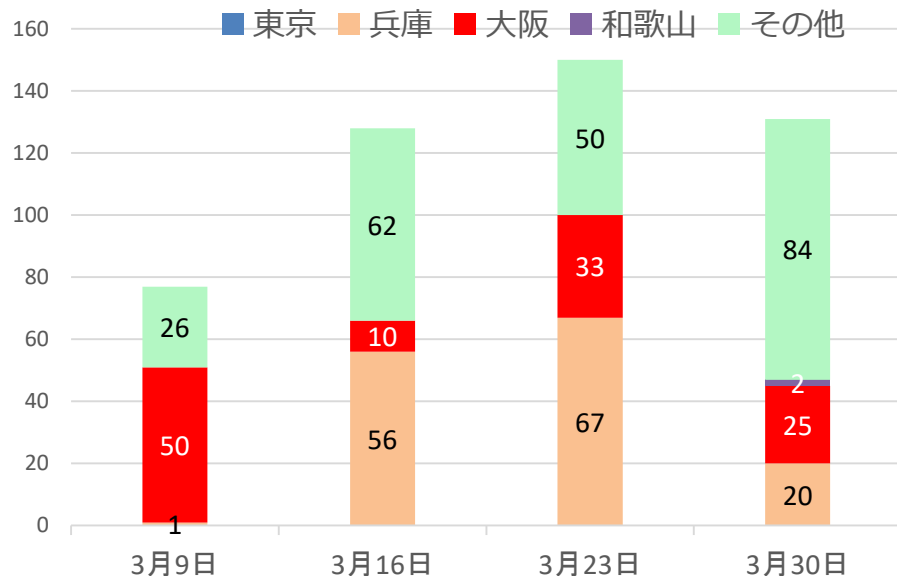
# 感染動向の推移（東京・大阪・和歌山） 1週間・人口10万人当たり

- 本県の流行の波やピークは、第三波以降は大阪とほぼ同調している。
- 特に、第四波では、大阪と同じように、変異株等の影響もあり、東京より急激な感染拡大が起こり、ピークも先に迎えた。ただ、東京では下げ止まりから増加に転じており、またデルタ型の変異株も徐々に見られることから、今後の動向を注視する必要がある。



# アルファ変異株患者発生状況の推移 (国内事例)

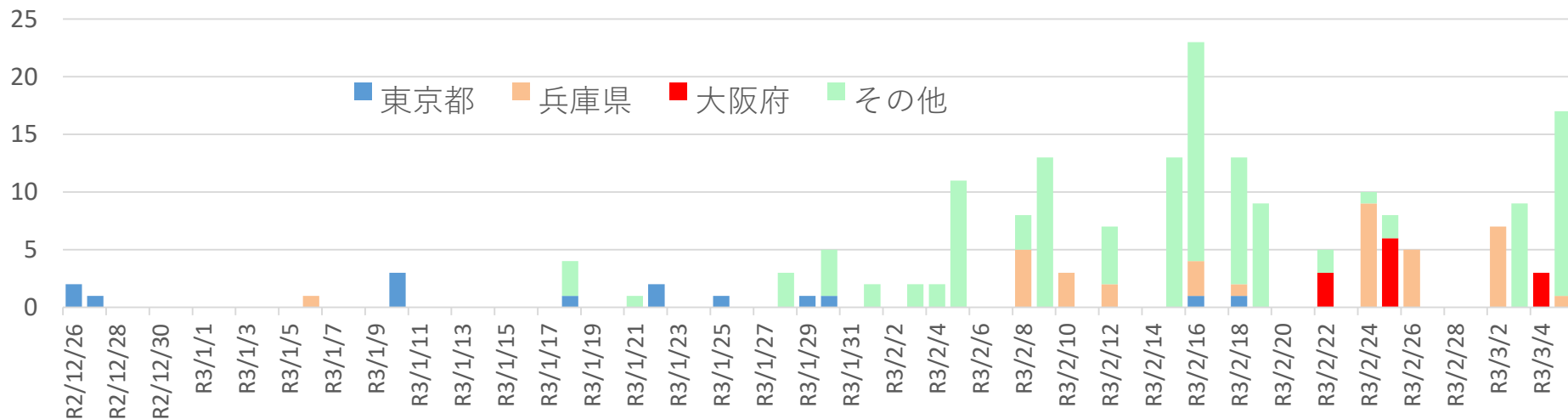
## 1. 令和3年3月6日～令和3年3月30日



関東	138
東京	18
中部	77
新潟	32
関西	349
大阪	130
和歌山	2
その他	112
累計	676

※ 3月9日は3月6日からの発生数

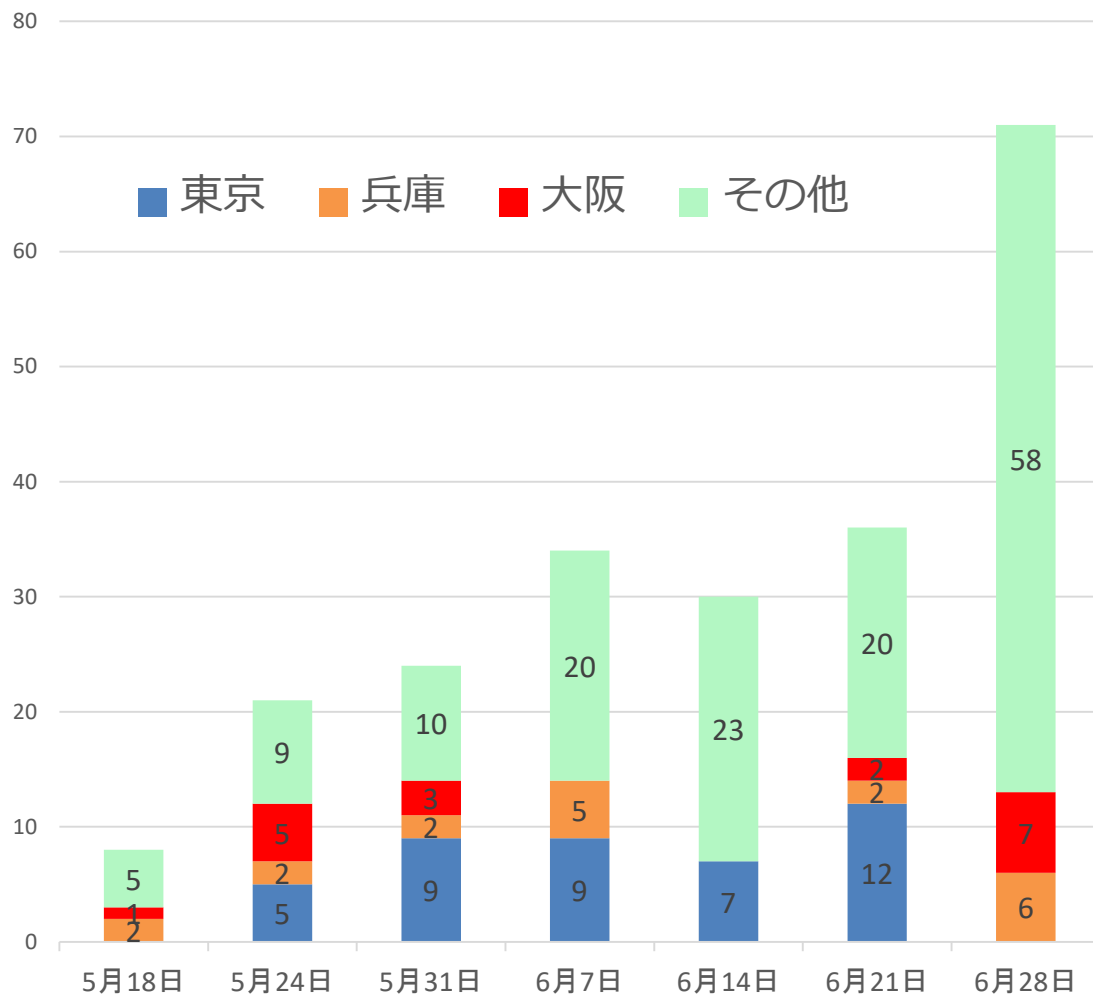
## 2. 令和2年12月26日～令和3年3月5日



厚生労働省 都道府県別の懸念される変異株の事例数 (ゲノム解析) (HER-SYS)より引用

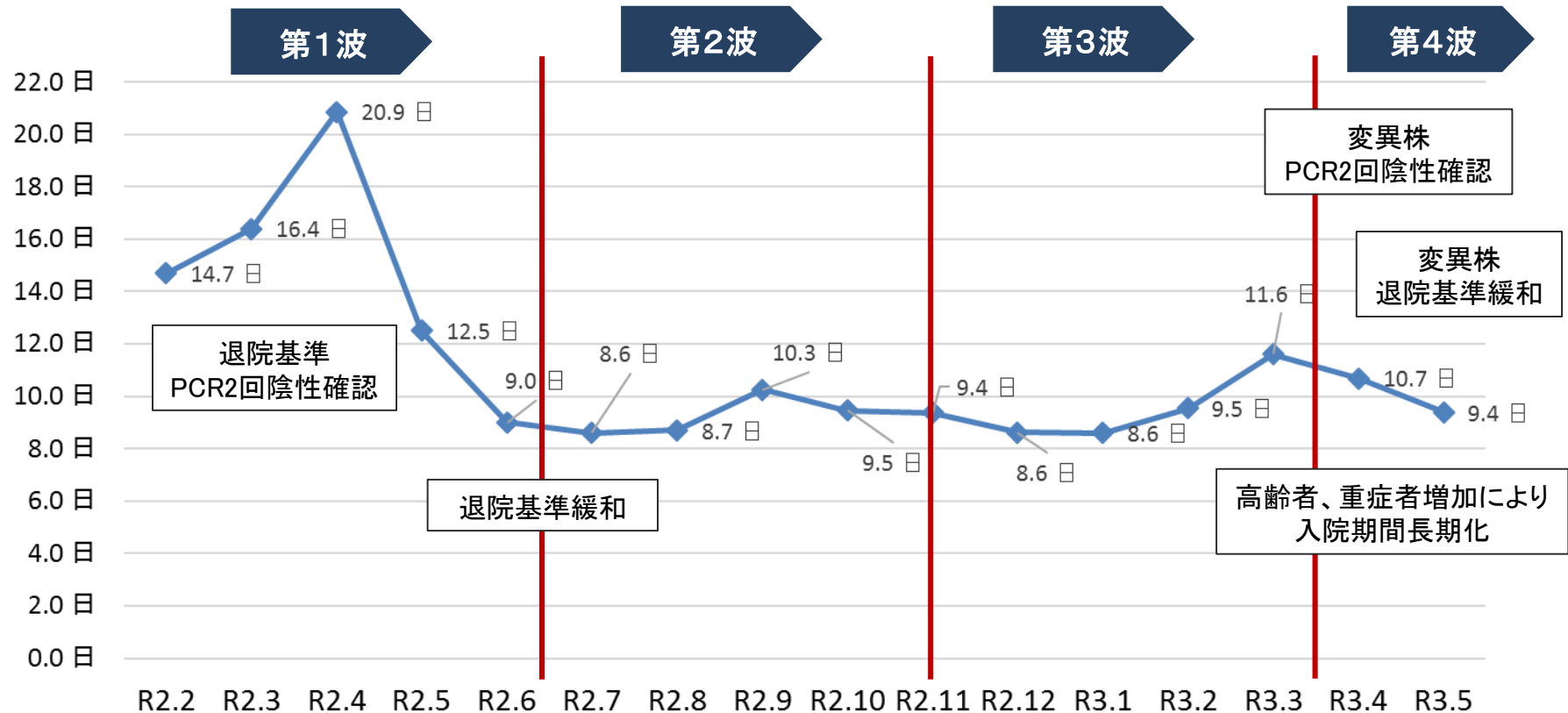
[https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/newpage\\_00054.html](https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/newpage_00054.html)

# デルタ変異株患者発生状況の推移 (国内事例)



関東	<b>136</b>
内)東京	42
中部	<b>40</b>
内)愛知	24
関西	<b>38</b>
内)大阪	18
その他	<b>10</b>
累計	<b>224</b>

# 月別平均入院期間の推移



	第1波	第2波	第3波	第4波
	R2.2.13~6.22	6.23~10.31	11.1~R3.3.13	R3.3.14~5.31
平均入院期間	19.0日	8.9日	8.9日	10.4日
最長入院期間	55日	25日	49日	56日

※5/31時点で退院している方を対象  
 ※県外カウント、入院拒否等、入院中の方を除く

# まとめ

- 令和3年3月14日から始まった本県の第四波は、大阪を主とした県外への往来や交流により感染者が急増した。これとともに変異株の感染者が急増し、家族や接触者に感染が急拡大したが、6月にはほぼ収束した。
- 感染の機会としては、家族等の共同生活が最も多く、飲食や会話、カラオケによる事例が多い。また、県外由来と考えられる事例や感染経路不明者が増加し、クラスターも多発し、一部で市中感染が起こっていたと考えられた。
- アルファ（イギリス）変異株は、3月14日に初めて確認されたが、現時点では従来株から置き換わった。変異株は、活動の活発な若者から家族や友人等に感染が拡大した。
- 年代別の肺炎併発率を見ると、変異株では、全年齢で従来株より併発率が高い。特に、20代、30代、40代の若い年代でも肺炎の併発率が高く、また酸素投与が必要な感染者が多いことから注意が必要である。
- 新型コロナウイルス感染の潜伏期間は1～14日で4日が最も多い。また発症前から発症日に他者に感染させることが多い。発症3日前に他者に感染させたと推定される事例が全体の1割はいることから、接触者の検査対象とすることが望ましい。潜伏期間や感染期間に変異株による差はなかった。また、初発症状として発熱がない者が6割いることは注意する必要がある。変異株による症状は従来株より顕著な傾向があった。
- 若い世代は無症状で経過する人の割合が高い。全経過で無症状のままは約5%で、陽性判明時無症状でもその後約8割は発症し、4割近くは肺炎を併発することから注意が必要である。特に、40代以上では、肺炎を併発し、酸素投与が必要な者が増えることや80代で致死率が高いことに留意する。
- 第四波では、クラスターが多発した。飲食関係、高齢者施設、病院関係が多かった。変異株では、クラスターの規模が大きくなる傾向があったが、感染拡大のスピードが早い変異株では、クラスターの早期探知が極めて重要である。
- 発症してから受診までの期間が5日以上経っている人が1割から2割いるが、これらの人は高齢者で独居や二人家族に多い傾向がある。また、受診の遅れは肺炎で酸素投与が必要になる人が多いことに留意する。一方、せっかく早期受診しても検体採取に至っていない事例が1割以上いることから、早期検査が望まれる。
- これまでも本県の感染拡大は、大阪の感染拡大と同調してきた。現在、デルタ株の感染事例は東京を中心にみられており今後、大阪そして本県にも拡大してくることが考えられ、一層の早期発見、早期隔離などが極めて重要である。また、ワクチン接種による感染拡大防止や重症化予防も期待され、早期に多くの希望者への接種が望ましい。